

Z32-B88

島崎村 友島生馬 監修

# 金の船

大正九年十月五日印刷納本

大正九年十二月日發行



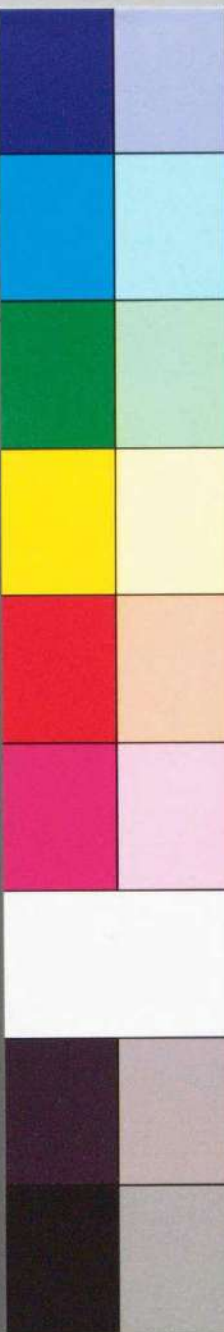
十二月號

第十二號  
 国立国  
 8. 3. 2  
 図書館

inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
 cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

## Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



## Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



# 「金の船」主催 第二回 童話劇及童謡音樂會

十一月二十七日兩日間、獨立劇場同人諸氏出演

童話劇

五郎正宗 (二幕)

金の鞭 (一幕)

鈴木善太郎氏作

本誌は本年二月九日の内有樂座に於て世界的童話劇「青い鳥」を民衆座同人諸氏により公演し、満都の少年少女諸君の熱狂的歡迎を受けました。前號豫告の通りいよ／＼獨立劇場同人諸氏によつて、「金の船」主催第二回童話劇を公演いたすことになりました。同時に、本誌創刊以來掲載の傑作童話曲譜も演奏いたして愛讀者諸君の御希望に酬ゆることゝいたします。この企ては日本の童話劇と童謡音樂に新しい曙光をあたへるもので、其當日の華かさは、どんなに多く少年少女諸君に高尚な喜びを與へることでせう！お子様を愛する御家庭の方々に特に御來觀を願ひます。

五郎正宗は、双親に捨てられた貧乏な家の子供でしたが、總て日本一の刀鍛冶になつて、親孝行をしたといふ。雖も位かすには居られない、鈴木先生が心血をそゝいだ傑作です。又、金の鞭も鈴木先生が會心の新作で、本居長世先生の作曲になられた面白い唄もはいつて驚ります。

## はだかの王様 (一幕)

長田秀雄氏作

はだかの王様は、世界一の童話作者アンデルセンの原作で世界でも有名なお話。長田先生が苦心に苦心を重ねて譯された童話劇「金の船」十月號に載つてなりました。王様の行列がどんなに面白いか少年少女諸君に興味の深いお芝居です。

當日登場諸氏

君島篤氏、頼照子氏、武井清雄氏、島田天涯氏、  
福田春子氏、三枝美葉氏、小林静一氏、千葉鼓堂氏、鈴木邦三氏、其他

## 童謡演奏

十五夜お月 (金の船第二巻九月號所載) 本居長世氏作曲  
人買船 (第二巻五月號所載) 同  
きりくす (第二巻十一月號所載) 山田耕作氏作曲  
お山の鳥 (第二巻七月號所載) 中山晋平氏作曲  
鈴蟲の鈴 (創刊號所載) 北村季晴氏作曲  
其他

會場 麴町區丸の内 保險協協會 (帝國劇場裏)

開演日 十一月廿七日(土曜日) 廿八日(日曜日)

兩日午後零時半開場

入場料 一圓二十錢均一

團體其他の申込みで満員のおそれがあります。成るべくは十一月二十五日まで割引券を添へ、金の船發行所(九段坂下キヤノン社)なり、金の船編輯所(市外田端三五一番地)なりへ御申込みください。

▲注意 金の船「誌友諸君には特典がありますから、編輯所宛にお申込み下さい。切取線

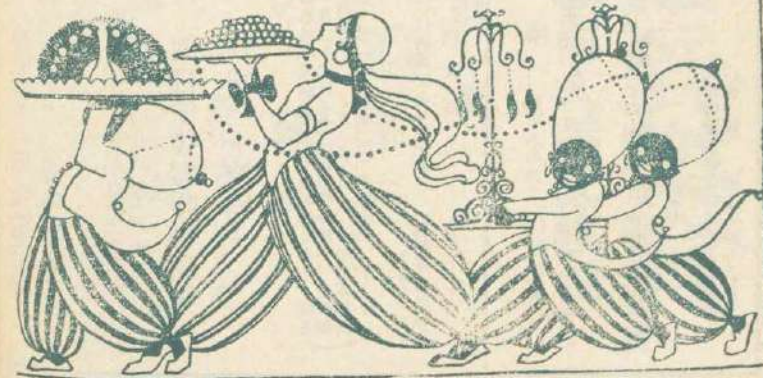
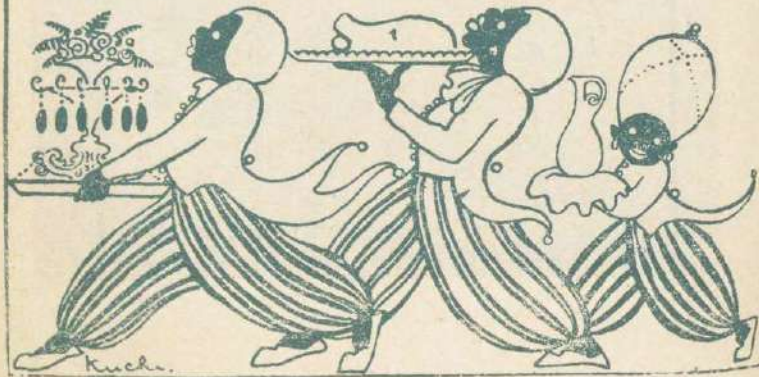
券引割	
會場	麴町丸の内 保險協協會
開演日	十一月廿七日(土曜日) 午後二時より 廿八日(日曜日)
主	「金の船」童話劇及童謡音樂會
此券御持参の方に限り入場料特に金一圓。但し一枚一人限り	



目次

密相山から 表紙、石版刷  
 尋ねる王女 (口繪原出版) ..... 岡本歸一  
 赤牛黒牛 (童話、曲譜) ..... 野口雨情  
 廣い廣い世界へ (童話) ..... 楠山正雄  
 アンパン泥棒 (繪ばなし) ..... 八 岡本歸一  
 人魚ものがたり (童話) ..... 三 西條八十  
 諸國傳説童話 (傳説) ..... 〇 藤澤衛彦  
 山六爺さん (童話) ..... 三 沖野岩三郎  
 百舌鳥が一羽 (童話) ..... 四 若山牧水  
 狐が化かされた話 (童話) ..... 四 齋藤佐次郎  
 王様とパン (童話) ..... 四九 小林愛雄

菊畑 (童話) ..... 七 前田林外  
 茶目な大猿 (サンチ畫) ..... 八 船橋重一  
 屋島の戦 (歴史童話) ..... 〇 窪田空穂  
 支那伊蘇普物語 ..... 六 楠山正雄  
 劍術のお弟子 (推薦童話) ..... 六 島田國子  
 鳩 (童話) ..... 西 野口雨情  
 私の母さん (推薦童話) ..... 五 加田愛咲  
 しづ (推薦幼年詩) ..... 五 早野ます  
 芋の葉 (童話) ..... 六 野口雨情選  
 鉛 (童話) ..... 六 山本鼎選  
 猫 (幼年詩) ..... 六 若山牧水選  
 蟻 (童話) ..... 六 編輯部選  
 通 (童話) ..... 六  
 挿畫 ..... 岡本歸一  
 葉落







尋ねる王女

岡本歸一畫

チャツクは敵を追つて行く途中、一人の犬の頭をした化物が美しい娘をさらつて、どんく逃げて行くところを見つけて、追ひついて降参させました。

その時とり返した娘が、たづねる王女だつたのです。

(楠山正雄氏「廣い廣い世界へ」より)



# 赤牛黒牛

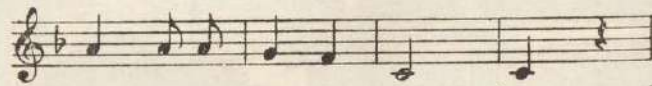
中山晋平作曲



5 5 5 5 | 5 4 4 | 5 — | 5 0 |  
あ か っ し くろ う し もー もー



5 5 5 | 4 4 | 5 — | 5 0 |  
あ っ ち ゃ へ びい ちや もー もー



3 3 3 | 2 1 | 5 — | 5 0 |  
こ っ ち ゃ へ びい ちや もー もー



5 5 5 | 4 4 4 | 3 — | 5 0 |  
こ こ さ ん か か さ ん もー もー



3 3 3 | 2 1 | 5 — | 1 0 ||  
つ の か は え て る もー もー



赤牛黒牛 (遊戯唄)

野口雨情

赤牛 黒牛

モー モー

あつち向いちや

モー モー

こつち向いちや

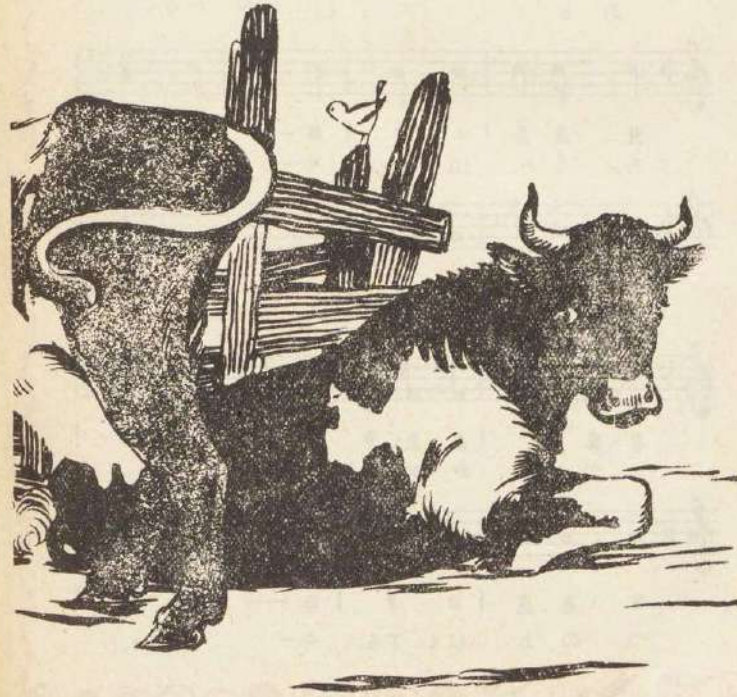
モー モー

父さん 母さん

モー モー

角が生えてる

モー モー



此唄は、幼稚園や尋常初年の生徒さん達が、遊戯の時に唄はれるように詠がついてなりました。







## 広い広い世界へ

(英雄ジャック・ポボルンの話その一)

楠山正雄

あなたはあのハンガリーの小さい英雄ジャック・ポボルンが、広い、広い世界をめぐる歩いて、いろ／＼とふしぎなことや、おもしろいことに出あつた長い／＼お話を知つてゐますか。ハンガリーといふ國はこんどのヨーロッパの大戦争

ジャック・ポボルンといふのは、はじけ唐もろこしのジャック」といふことです。でもなせそんな妙な名がついたのでせう。

むかしハンガリーの広い広い野原に百姓の夫婦が住んでゐました。御亭主の百姓は亂暴ないちの悪い男でしたが、お上さんはそれは女らしいやさしい氣立の人でした。このお上さんがある日唐もろこし畑に出てゐますと、どこかで悲しうに泣く赤んぼの聲がしました。お上さんはびつくりしてその聲をあてに探して行きますと、深い厩の中にかあいさうに生れたばかりの男の子が泣いてゐました。

『まあ可哀さうに。』といひながら、お上さんは其子を抱き上げて、丁度自分にも子供がないものですから、この棄兒を拾つて育てようと思ひました。けれども子供を拾つて育てるなんといふことに

から後、チエコ・スロヴァキアといふ立派な獨立國になりましたから、ハンガリーの名はもう世界の地圖からなくなつてしまひましたが、その國の人民はもとは、わたしたちに近い東洋人の血をうけた人達なのです。その正直で勇氣のあるハンガリーの人たちから、ジャック・ポボルンといふ名はもう久しい間どんなに好かれてゐるでせう。

二

は、むろん御亭主は大反對で、お上さんのいふこともほんたうには聞かずに、がみ／＼となりつけてゐましたが、それでもお上さんは閉口しないで、根氣よく御亭主をなためてゐました。

『今にこの子が大きくなれば、お前さんの代りに畑のしごとはみんなしてくれますよ。』

こんなことでたうとう棄兒は、百姓の家に拾はれることになつて、唐もろこし畑にはじけて轉がつてゐたといふので、ジャック・ポボルン——はじけ唐もろこしのジャックといふ名がついたのでした。

さて長い年月が立つて、ジャックはりつばな若者になりました。毎日畑へ出て耕作をしたり、山へ上つて牛や羊の番をして、まめに働くやうになりました。それはするぶんはげしい労働でしたけれど、ジャックは證が丈夫でしたから、何とも思





は羊たちが草を食べるところを見張つてゐると、イリユースカはそのそばの小川で布を洗つてゐました。ジャツクは草の上に上着をして寝ころんで、イリユースカにいろ／＼と未来の楽しいもくろみを話してきかせます。イリユースカは目をまわくして耳を傾けながら、もう今のつらい境遇などは忘れてしまつて、遠い／＼幸福ばかりを夢に見てゐまし



ひませんでした。たゞあの心のやさしいお上さんは、ジャツクがまだ子供の中に死んで行つてしまつて、あとは懲ばりでいちの悪い主

人の百姓だけがこのつて、朝から晩までジャツクをつかまへては、がん／＼口やかましく手前勝手な小言ばかりあびせるのでそれを何よりジャツクは辛がつてゐました。

そのうち、自分を拾つて育てゝくれた深切なお上さんに別れて、悲しがつてゐるジャツクの心を優しく勞つてくれるものができました。夫は近所の村に住んでゐるイリユースカといふ娘でした。

イリユースカはジャツクと同じやうに、やはり父親も母親も分らないみなしごでした。それでこの娘を今育てゝゐる繼母といふのは、この界限で誰知らないものもない悪い魔女で、それは始終ひどくこの娘を打つたり叩いたりしました。

親の無い二人の子供たちは、あついで夏の日ざかりに、牧場の青い草の上で出會ふのを何よりの楽しいことにしてゐました。そんな時大抵ジャツク

た。話をしない時には、ジャツクはよく笛を吹いてきかせました。その笛の音に合せて、娘は可哀らしい歌をうたふのでした。

もうこの邊の七箇郡でイリユースカほどの美しい娘はありませんでした。ジャツクほど強い、勇氣のある若者はありませんでした。

或日の夕方、もう太陽は西に沈んで、遠くの山も近い野もばんやり暮れかけてゐましたが、いつものやうに二人は牧場の草の上に坐つて、楽しい未来の物語にふけて、暗くなつて來たことも、家にかへることも忘れてゐました。こは繼母のことも、亂暴な主人のことも何もかも忘れてしまつてゐました。處へ娘の繼母の悪い魔女がふいにそこへ出て來ました。

「このわるものめ、今ごろまで何をしてゐる。」かういふなり魔女は娘に打つてかゝらうとしま



した。ジャックはとび上がつて、いきなり魔女の目のさきで拳固をふりまはしながら、「止せ。止さないとお前の家に火をつけて焼き殺してしまふから。」といひました。

そのけんまくがあんまり恐いので、さすがの魔女もびつくりして、ぶつ／＼口の中でつぶやきながら、娘を引きずつて歸つて行きました。

イリユースカが歸つてから、ふと氣がついて見ると、話に夢中になつてゐる中に、羊の群がいつの間にかどこかへ行つてしまつたので、ジャックはびつくりしました。あわて、上着を着て、そこらを探してまはりましたが、まるつきり行方が分りません。狼にでも食はれてしまつたか、山賊にでもとられて行つたのか、ジャックは真夜中すぎまで山といはず野といはず探して歩きましたが影も形も見えませんでした。

ました。ジャックはそこでどん／＼逃げ出しましたが、百姓はどこまでも追つかけて來ました。でも年をとつてゐるものですから、ちきに息が切れて、途中でへたばつてしまひました。ジャックが逃げたのは、こはくつて逃げたではありません。年寄に手向ひをするのがいやだつたからです。

随分無慈悲な男でしたけれど、長い間自分を育てゝくれた恩人ですし、それにこんどは自分の方にしくじりがあるのだからと、ジャックは思つてゐました。

ジャックはこの時はじめて、廣い、廣い世界へ出て、一ばん自分の運だめしをして見ようといふ決心をしました。それでもう一度好きなイリユースカに逢つて、おわかれの言葉をいはうと思ひました。

ジャックは自分のつとめを正しく果たさなかつたことを恥かしく思ひながら、しを／＼家へ歸つて行きました。歸ると、主人の百姓はもう心配と立腹で腸が煮えくり返つて死にさうになつてゐました。

『羊はどうした。』  
百姓はいきなり、金切聲をあげてとなりつけました。

『申譯がありません、わたしの不注意で羊をどこかへやつてしまひました。これから一生けんめい働いてきつとこの償ひをいたしますから、どうぞ勘忍して下さい。』とジャックは地べたに手をついてあやまりました。

ジャックがかういつてゐる間に、百姓はいきなり鐵の熊手をとつてジャックに投げつけました。ジャックがとびのいたので、熊手はねらひを外れ

八  
娘の住まつてゐる家の前へ來ると、ジャックはこの上ない悲しい笛を吹きました。その笛の音を聞きつけて、すぐに娘は窓の上に顔を出しました。二人は抱き合つて、おわかれの言葉をいひ合ひました。イリユースカはどんなに泣いたでせう。ジャックはわざと横を向いて涙をかくしてゐました。二人が逢ふのはこれがおしまひではないでせうか、もう／＼この世では二度と顔を見て話をす







る時がないのではないでせうか、二人はそんなことを思つて、なほ／＼悲しくなりました。いよ／＼おわかれといふ時に、ジャックの言ひのこした言葉はかうでした。「白い綿毛が風で飛んで來たら旅に出てゐるわたしのことを思ひ出して下さい。」するとイリユースカが、「ちぎれた花びらが地に落ちて

ゐたら、悲しがつてゐる娘のことを思出して下さい。」といひました。かうして二人はわかれてしまひました。ジャックは好きなイリユースカに別れたかなしみで胸が一杯になつて、西も東も分からずに歩き出しました。それはくらしい、静かな、静かな晩でした。

三

それから三日と三晩、ジャックは山から谷へ、谷からは知らない廣い野へと歩きつゞけて、四日めの晩、或くらしい陰氣な森の中に入つて行きました。もうその時にはさすがのジャックも疲れきつて、お腹が空いて、どこでもいゝ温い火とやはらかな寝床のある家を見つけて、一晩休んで物を食べさせてもらひたいとそればかりを願つてゐました。それで森の奥からチラ／＼赤い火が見えて、寂しい宿屋らしい家が樹立の隙間から見え出

して來た時にジャックはくたびれた思も忘れて、踊り上がりました。けれどもこれは森の中の寂しい宿屋ではなくつて、十二人のわるい山賊どものすみかだつたのです。

山賊共はちやうど夕飯の食卓に向つてゐて、お酒をのんだり歌をうたつたりして騒いでゐましたが、ジャックが入つてくると、みんなびよこんととび上がつて、てん／＼劍だの斧だの鐵砲だのを持つて、このふいにとび込んで來たお客に向つて來ました。

けれどもジャックはまるでこはいといふことを知らない若者でしたし、それに何しろ疲れきつてゐて、もう命なんかはどうでもいゝやうな氣になつてゐたのですから、山賊共のおどかし位何とも思はない風でにこ／＼しながらそこに立つてゐました。すると山賊仲間のお頭らしい男が手をふ

つて仲間を止めながら、ジャックに向つて、「おれは貴様が可哀さうになつたのではない。なぜ貴様がそんなに物をこはがらないのか、そのわけが聞きたいのだ。」といひました。「でもわたしは何にもこはいものがないから。」とジャックはいひました。

するとお頭はうなづいて、「うん／＼貴様はなか／＼勇氣があるな。おれたちの仲間に入れ。見ろ、あすこには金の一杯つまつた袋がある、こちらには銀の一杯つまつた袋がある。あれはみんな仲間が人を殺して分捕をした寶だ。あれを貴様にも分けてやる。どうだ、仲間に入らないか。」

ジャックは聞きながら、心の中で輕蔑したり、腹を立てたりしてゐましたが、うはべはあく迄、もつともらしい顔をして、山賊の仲間に入る約束ま



でしてしまひました。

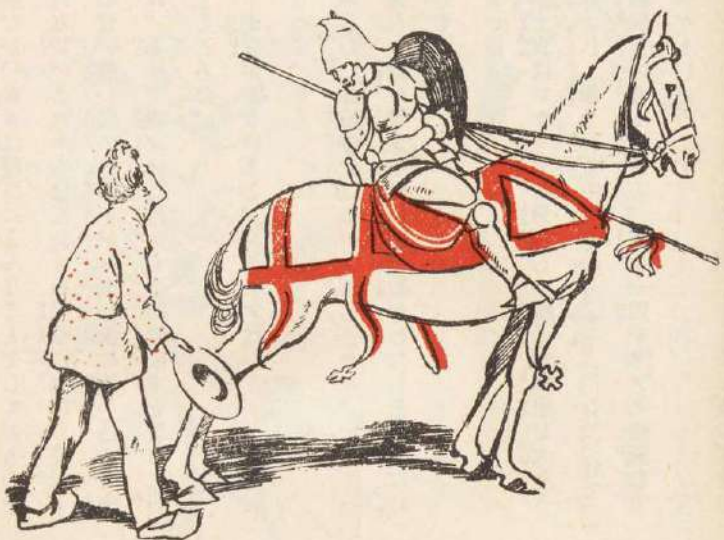
「あなたがさういつて下さると、わたしは何よりうれしいのです。わたしがこゝへ来たのも、お仲間に入れて使つて頂くつもりだったので。」

かうジャックがいふと、お頭はほく／＼喜んでゐました。

それでみんなはつひこの頃盗んで来た酒樽からお酒をどぶ／＼酌み出して、また賑かなお酒盛りがはじまりました。

そしてさん／＼酔つばらつて騒いだあとで、一人々々ごろ／＼床の上に倒れて、ぐう／＼大軒をかいて寝てしまひました。たつた一人ジャックだけは一しづくのお酒も飲まずに、しやんとしてゐました。

ジャックは山賊の寝てゐる間に、お金を持ち出して行つて、それで主人に無くした半の代も返さ



うし、のこつたお金で家と田地を買つて、イリュースカと二人で楽しく暮らさうと思ひました。かう思つて胸ををどらせながら、ジャックは金の袋に手をかけましたが、ふとこれはよくないことだと気がつきました。

ジャックは正しい心をもつた子でしたから、こんな人を殺してとつたきたないお金で、自分の幸福を買ふやうなことをしてはならないと思つたのです。

そこで食卓の上でかん／＼黙つてゐる蠟燭をつつて、家の四隅から火をつけました。見る見る酔つばらつた悪者どもは、お頭も仲間もみんな煙に包まれて死んでしまひました。さうしてジャックはたたくさんの金銀を灰の中に見捨てたまゝ、また森を出て行きました。

それから一晩くらい森の中を歩いて、森を出は

づれるとらやうど夜が明けました。その時さらさらと美しく輝いた朝日に甲冑を光らせながら、騎兵の一隊が通つて行きました。

この勇ましい行列を見ると、ジャックは胸をわく／＼させながら、羨ましさに立つてながめてゐました。

ふとそれを見つけた騎兵の士官がふしぎに思つて馬の上から聲をかけました。

「おい／＼どうした小僧さん。この晴れ／＼しい日に、君は何だつてつまらなさうな顔をしてゐるのだ。」

「わたしは広い世界に一人ぼつちで歩いてゐるので、そんなにつまらなさうに見えるのでせう。あなたの方の隊に入れて下さい、さうすると、わたしは世界中で一等幸福な人間になれるのです。」とジャックはいひました。



「だが、我々は遊びにこんなことをしてゐるのではない。これからほんたうの戦争に出かけて行くのだ。黒い國の犬頭王が、金の國に攻め込んで来た。それで我々はこれから金の國の王を助けに行くところだ。」

士官がかういふと、ジャックはいよ／＼熱心になつて、

「わたしは戦争をこはがりはしません。だつてわたしは敵を殺さなければ、敵がわたしを殺すだけです。」

といひました。

士官はジャックの男らしい様子や氣象を大そう好ましく思つたものですから、部下にいひつけて、驃騎兵の着る甲冑と、馬を一匹ジャックに貸してやりました。

それでジャックは隊の中でも一ばん目に立つり



は大事な王女まで敵にとられてしまつたので、おい／＼泣きながらこの美しい國を棄てて逃げて行かうとするところでした。

王様は驃騎兵が加勢に来てくれたことをどんなに喜んだ

つばな驃騎兵になりました。

さて金の國へ進んで行く道には、寒い「水の國」があつて、そこではみんな馬を脊中にしつかり脊負つてやつと寒さをしのぎました。「高い國」では空までつきぬけてゐる高い／＼山をのぼらなければなりません。何しろ日が近いので、あつくつて焼け死にさうでしたから、晝は山の洞穴にかくれて夜になつて歩き出しましたが、こんどは馬が星につまづいて度々轉げさうにしました。やつとの思ひで高い國を通りぬけて、その明くる朝金の國に着きました。

金の國といふのは、この世の天國でした。金銀や寶石は往來にころ／＼ころがつてゐて、人民は誰も彼も同じやうにお金持でした。けれども驃騎兵の一隊が着いた時には、もう犬頭王の軍隊のために、荒らされるだけ荒らされてしまつて、王様

でせう。

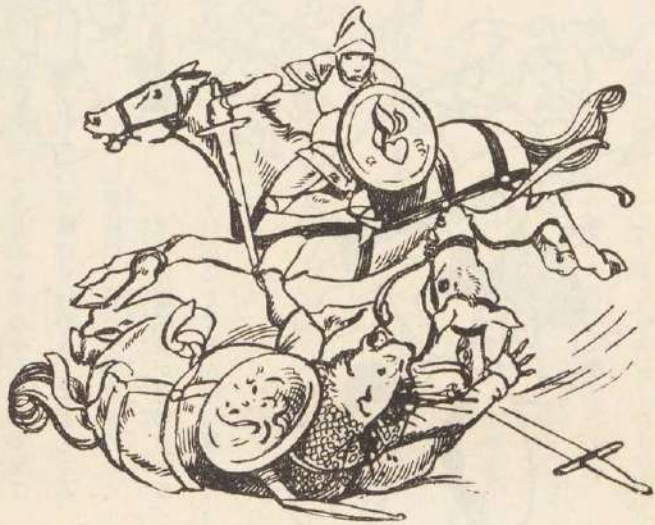
もう、どうかして王女を敵の手から奪ひかへしてくる人があれば、お禮にはこの王國と一しよに美しい王女をつけて上げるといひました。

若い驃騎兵たちは、それを聞いてすばらしい元氣になりました。でもジャックだけは一人であのわかれて来たイリュースカのことばかり考へてゐました。

さて明くる日から驃騎兵と犬頭王の軍隊との間に、世界がはじまつて以來の一ばんはげしい戦がはじまりました。

どうして犬頭の軍隊はなか／＼強くつて、驃騎兵とはちやうどい／＼相手でした。何千といふ犬の頭がワウ、ワウ吠えながら向つてくるのがまるで雷が落ちかゝるやうなひどい響でした。歩いてくる足の下





地べたはぐすりぐすり地震のやうに揺れました。  
雷も地震も平氣の平左で勇ましく闘ふ驍騎兵の

まひました。

亂暴な敵兵のために追ひちらされて、山の中や谷の蔭にかくれてゐたこの國の人民たちは追々に方々から集つて来て、女王様と一しよにめでたく凱旋してくる驍騎兵をとりまいては、泣いたり笑つたり大さわざをしてゐました。けれども一ばんおしまひに、ジャックが首尾よく敵兵の手から王女を奪ひ返して、歸つて来た時の喜びの関の聲といつたらありませんでした。

ジャックは、敵を追つて行く途中、一人の犬の頭をした化物が美しい娘をさらつてどんく逃げ行くところを見つけて追ひついて降参させました。

その時、とり返した娘が、たづねる王女だつたのです。

王様はうれし泣きに泣きながら、ジャックと王

仲間でも、一ばんはげしく闘つたのはジャックでした。あんまりジャックがきびくと働くの、遠くから憎らしさうにながめてゐた犬頭の大將が、たうとうがまんがでなくなつて、斧をふりまはしながらジャックに向つて来ました。それは山に目鼻をつけたやうな大男でした。  
「二人前には大きすぎる奴だな。二つに切つてやらう。」

かうジャックはいひながら、一ふり劍をふるると大男の胴と手足が別々になつて、のつてゐた馬の右左に落ちました。

大將が殺されると、敵の軍勢の中にわあッといふ悲しさうな叫びごゑが起つてみんな我勝ちに得物を捨て、逃げ出しました。

驍騎兵はそれをどこまでも追つかけて行つて、たうとう敵兵をのこらす國境の外へ逐ひ出してし

女を一しよに抱きしめて、

「わたしももう年をとりすぎてこの國の政治がとまらなくなりました。あなたに王女を上げますから、わたしの代りに二人でこの國を治めて下さい。」

かういつて王様は頼みましたけれど、ジャックは首をふつて、

「でもわたしには、國にわたしの歸りを待つてゐる娘がとぎやいますから。」といつて承知しようとしませんでした。

それでジャックは王様からもらつた金貨の袋を三つ腰にぶら下げて、王様にも王女にも、驍騎兵たちにもおわかれの挨拶をして、王様の仕立て、くれた船のつて、また家の方に向けて、こんどは長い船の旅をつづけて行きました。(つづく)





二

山田はアンパンを横取りして、外の方へ逃げ出したので、僕は口惜まぎれ追ひかけながら『盗棒』とどなりますと、丁度そこへ通りかゝつた職人さんが、

『なに、こいつか』と云ふなり、はだして『盗棒』とどなり乍ら、追ひかけました。

山田は、ふいつと大人のひととび出されたので、びつくりして逃げて行きました。

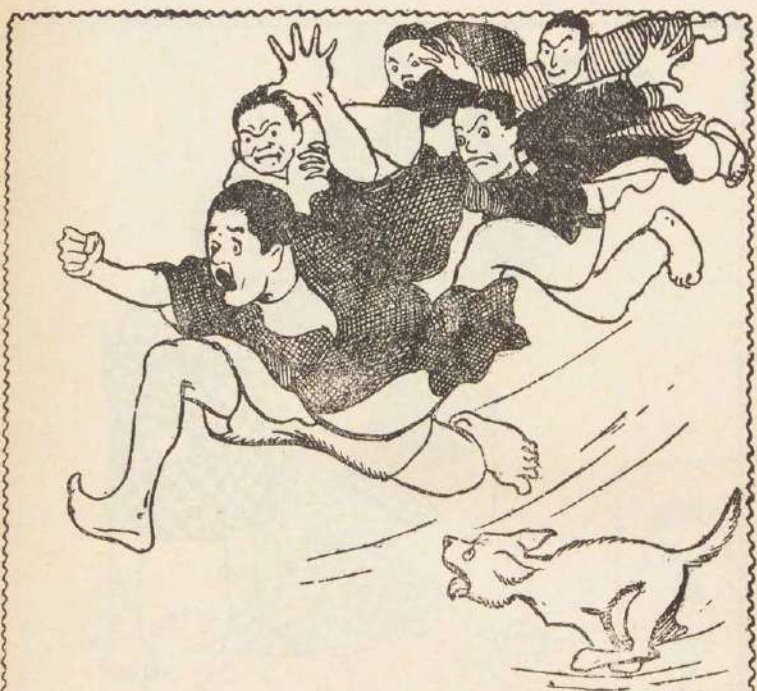


ママ、パシどろぼー  
おつもとまー

一

僕の家は大勢僕達を可愛がつてくれる、山田と云ふ書生が居ましたが、只一つ、いつでも僕達の食べて居るお菓子を、横取りする悪い癖がありました。あの時も、お母さんに頂いた、アンパンを食べて居ますと、いつの間に来たか、山田に又後からひよい！とさらはれました。



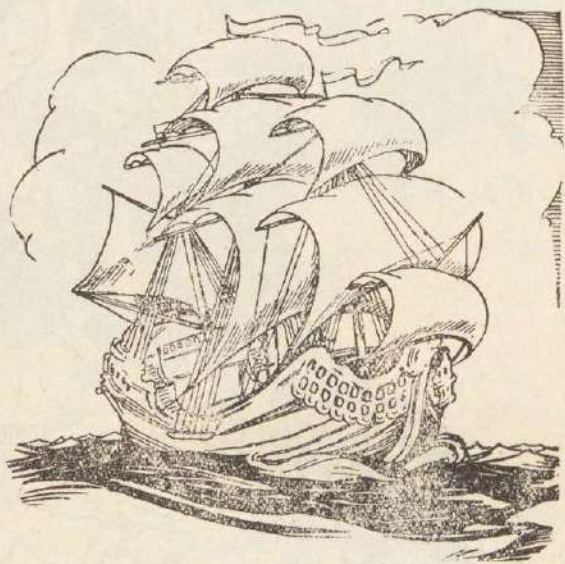


三  
 「いゝ氣味だ、ざま見ろ」と笑つて居ましたが、もしもほんたうの盗棒とまちがへられて、ひどい目に會ひはしないかと思ふと、しんばいになつて來ました。  
 そこへどこをどうにげまはつたか、彼方の方から大勢の人に追ひかけられて、バンどろばうの山田が、  
 「助けて呉れ」と云ひ乍ら逃げ來て、私の後へしがみつきました。

四  
 僕は一生懸命、山田をかばひ乍ら、  
 「ほんとの盗棒ぢやないんだよ、僕のアンパンをとつただけだよ。」と云ひましたが、其間にも可哀相に山田は二つばかりなぐられました。山田がにぎりつぶして、くしゃくにしたアンパンを出したので、皆大笑ですみました。  
 それからは山田も、もうよこどりはしなくなりまして。







## 人魚ものがたり (後篇)

西條 八十

一  
人魚は望み通り、大好きな皇子の傍で楽しく暮す身になりましたが、心の中には人知れぬ苦しみが澤山ありました。その一つは皇子にせがまれて毎日のやうに踊りを見せることでした。ただでさへ一足毎にナイフの刃の上を渡るほどに膝が痛むのに、それでさも楽しさうに永い時間踊つてみせる辛い苦しさ。それは何とも云へないほどでした。それからもう一つは夜になると海の底に残してきた姉の王女たちが、お城の窓ちかくまで泳ぎ出て来て、さも悲しげな聲で自分の名を呼ぶことでした。時には祖母様の聲も、また老つた父王に似た聲も風にまぎれて聞えて来ました。王女の其時の心の中の悲しさと云つたらありませんでした。その間にも王女が皇子を慕ふ心は日増しにはげ

しくなりました。皇子の方でも劣らず可愛がつてくれましたが、その可愛がり方はちやうど嬰兒を可愛がるやうな愛しかたなので、王女はすこし物足りなく思ひました。もし皇子が自分を早くお嫁さんにして呉れなければ自分はあの死なない靈魂を得ることも出来ず、また萬一皇子がほかの人と婚禮でもしたなら自分はその翌日に海の泡沫となつてしまはなければならぬことを考へると、人魚の王女はもう居ても立つても居られないやうな気がしました。

「あなたはわたしを誰よりもいちばん愛して下さるの？」王女は折々かう皇子に訊ねました。

「あゝ僕はあなたをいちばん愛してゐるよ。あなたはほんたうに優しいひとだし、それに昔僕が難船してある砂濱へうち上げられた時、まつさきに僕を見つけて命を助けて呉れたことのある娘さん

によく似てゐるのだ。その美しい娘さんの顔は僕は未だに忘れない。で、どうかして僕はその女を嫁に貰ひたいと思ふのだけれど、その女はお寺へ入つて尼さんになつてゐるさうだから、とても僕の望みはかないさうもないのだ。」かう皇子は答へて、ほつと悲しげな嘆息をつきました。

これを聞いた人魚の王女の心はどんなでしたらう！

「あゝ皇子は何にも知らないのだ。このわたしがあれほど苦勞して皇子を抱いて波間を潜りぬけ、やつとの事であの砂濱に助け上げたことはちつとも知らないのだ。さうしてあの時森の中の白い家から出て来た娘が命を助けて呉れたのだとばかり思つてゐるのだ。なんと云ふ情ないことだらう！せめて一言でもこの口が利ければ残らずの話が出来ただけけれど。」と、王女は身もたえして嘆きま





したが、皇子の方ではつゆその心中を知るよしもありませんでした。

そのうちに皇子が隣國の美しい王女と近々に婚禮するといふ噂が、何處からともなく人魚の王女の耳に聞えてきました。それかあらぬか王子は毎日濱へ出て巨きな船を造らせることを急いでおました。人魚が或る日手真似でこのことを皇子に訊きたまいますと、皇子はわるいことを知られたと云ふ風に頭をかきながら、實はお父さんとお母さんの言付けでとにかく、隣國まで王女を見に行くことになつてゐるが、自分は決してその女と婚禮をするつもりではない。もしどうしてもお嫁さんを貰はなければならぬやうだつたら、歸つて來てお前をお嫁にするつもりだ。——と安心が行くやうに人魚に話して聞かせました。併し人魚の王女はどうしてもその成行が心配なので、とにかく

皇子と一緒に船へのつて隣國までゆくことに心を決めました。

皇子と人魚の王女とを乗せた船は、大勢の船夫に操られて或朝隣國の港へ着きました。寺々の鐘は珍らしいお客を迎へる歡びに鳴りわたり、國ちの軍人や役人たちが悉つて波止場まで出迎へました。やがて三日間といふもの隣國の皇子を歓迎するための大宴會が催されました。併しいぢばん大切のこの國の王女はなか／＼姿を見せませんでした。何でも話に聞くと、王女はいろ／＼な禮儀作法を覺えるために遠くの森の中のお寺へ預けられてゐることでした。が、三日目の夕暮になつてやうやく王女は迎へる者と一緒に戻つてきました。

どんな王女かしらと、皇子よりも人魚の方が胸をどらせてその姿の現れるのを待ちうけてゐまし



た。やがて廣間に入つて来たその姿を見ると、人魚は今までに見たこともないその美しさ氣高さに思はず恍惚してしまひました。しかも臆を定めてよく見ると、それは紛れもないあの砂濱で皇子の身體をいちばん先に見つけた、白い尼寺の中の娘でした。

「お、あなたでしたか？ あなたはいつぞや僕の命を助けてくれました。僕はそのことを今日まで忘れないでゐました。まあ何といふ幸福だらう！」と叫んで皇子は飛びかゝつて王女の白い掌を握りしめました。さうして傍にゐた人魚の王女を振顧つて、

「あなたも喜んで下さい。たうとう僕が探してゐたお嫁さんが見つかったから。」と云ひました。

人魚の王女もとりあへず皇子に向つて嬉しさうな笑を返しましたが、その心はこの時からまるで

二六  
鉛のやうに重くなりました。皇子が婚禮した翌日には自分の身體は海の上のはかない泡沫と化つてしまふことがしみじみと想はれた。

二  
間もなく皇子と王女との盛大な結婚式がこの國の都で催されました。薫りの高い香膏は街ちうの鋪石の上にもまで洪水のやうに濺がれ、美しい花束が雨のやうに青空に撒かれました。婚禮の式場には人魚の王女は花嫁の衣裳の裾をさへ上げて列りましたが、可哀さうにその耳には華やかな音楽の音も聞えず、また莊嚴な儀式も眼に見えず、たと明日となれば身にせまる恐ろしい灰色の死の影ばかりが映つてゐました。

結婚式が無事に済むと花嫁と花婿はひとまづ皇子の國へ歸るために、夕暮から船に乗りうつりました。船の甲板にはこのめでたい客を迎へるため

の紅白紫黄さまざまの天幕が張られ、祝砲の音が殷々と海の上に轟いてゐました。日がとつぶり暮れると、華やかな色の燈が船内隈なく點され、甲板では湧きたつやうな音楽の音につれて船員たちの舞踏が始りました。

寂しい胸にちつと手を當て、この景色を眺めてゐた人魚の王女は、そとろに自分のはじめの皇子を船の上で見かけた昔の夜の事を想ひ出しました。あ、あの時、皇子の美しい顔をさへ見なかつたら今になつてこんな辛い思ひをするでは無かつたらうにと思ふにつけても



氣がたまらなく狂はしくなつて思ひ切つて甲板へ驅けてゆき、船員のなかに交つて踊つて踊つて踊りぬきました。これが名残と覺悟をきめた人魚の王女の舞踏の、その夜の手ぶり足ぶりの鮮やかにもまた華やかだつたこと！ 船員たちはいづれも自分たちの舞踏を止めて、うつとりと酔つた



やうに王女の科に見とれてゐました。

踊りつかれた人魚の王女は、やがて人々の仲間から離れて、船の手欄に凭れ、遠い、遠い、月夜の海を眺め、やがてあの月が落ち、東の空が赤くなるころには自分の命は無くなるのだと、はかなく嘆いてゐますと、この時ふと海の面に懐かしい姉の王女たち五人の姿が浮び出てきました。怪しいことには姉たちの顔も自分のやうにひどく蒼白め、その房々とした黒髪はどれも根もとから切りとられて跡もありませんでしたが、一齊に聲をそろへてかう船の上の妹に呼びかけました。――

「妹や、おまへはもう一時間と経たぬ間に死んで海の寂しい泡沫となるのだよ。わたしたちはそれが悲しさに、皆で大切な黒髪を切りはらひ、それをあの魔法使のお婆さんにやつて、代りにおまへの生命を助けるこのナイフを貰つてきた。さ、お

にガラリとナイフを海へ投げ棄て、せめての名残りに、ちらと皇子の横顔を眺めて、そのまゝ、ごんぶと海のなかへ飛び込みました。――

あゝ、この時すでに太陽はあか／＼と海の上ののぼりました。可哀さうな人魚の軀はつひに返らぬ泡沫と解け去つてしまつたでせうか？

飛び込んだ王女もはじめはさうと覺悟して静かに眼をこぼしてゐましたが、そのうちふと眼をあくと、太陽の光ははや波の上を真紅に染めてゐるのに、自分の軀はまだ水の泡沫には溶けてゐませんでした。そればかりでなく、何やら透きとほつた美しい幾百千ともない影のやうなものに伴はれて、天へ、天へとたかくのぼつてゆくやうでした。「もうなにも心配しないでいゝの。あなたは今日から空の子になつたんですよ。」と、その透きとほつた影が、何とも云へない朗らかな聲で王女の耳

まへはこのナイフでまだ夜の明けぬ今のうち、皇子の胸をぐつと刺し貫くのだ。さうして皇子の赤い血がこぼれておまへの身體にかゝれば、おまへは以前の人魚となり、まだ三百年も生きのびられるのだ。さ、早く、今のうちに、一刻も早く皇子の胸を！」かう喘ぎ／＼叫んで姉たちの姿はもとの波間に消えてしまひました。

情ふかい姉たちの手から鋭どい一挺のナイフを受けとつて人魚の王女は、急ぎ足で皇子の船室へ近づき、そこに懸つた猩々緋のカーテンを襲つてツツとなかを覗いてみました。皇子と花嫁の王女とは、つい眼の前どころで今も互に手を取り合つてしきりと何か睦じさうに話をしてゐるところでした。波だつ胸をおさへ思はずナイフの柄をしっかりと握りしめた王女は、あはや皇子めがけて一つきと身構へましたが、――何思つたかその途端

もとで囁きました。

「人魚には永久に死なない靈魂と云ふものが無くそれを得るには人間のうちの誰かに心から愛されなければならぬけれど、わたしたち空の子はただ善い行をさへすれば死なない靈魂を得ることが出来るのです。あなたは幸抱よくかす／＼の苦勞をしたおかげで、今日から空の子になることが出来たのです。これからさき三百年の間に、あなたが善い行をさへ重ねれば、いつまでも死なない靈魂が得られるのですよ。」

人魚の王女はこの優しい言葉を聞いて、夢みるやうなその青い瞳をぱつちりさせ、さも嬉しさうに微笑みました。さうしてさま／＼な悲しいこと願はしいことのみちてゐる人間世界を下に瞰て、薔薇いろの雲の泛んでゐる楽しい空のうへへとしづかにのぼつてゆきました。(をばり)





# 諸國傳説童話

## 藤澤衛彦

### 母川の主殿

昔、一人の旅僧が、阿波國海部谷の母川畔を、とぼくとやつて来ますと、可愛らしい少女が、一生懸命になつて、その川の水を深出してゐるのに出會ひました。見れば、小さい手で、根氣よく水を掬つてゐるのですが、そんな事で、流の水の減らう筈もありませんでした。旅僧は、不思議に思つて、

「これこれ頼さん、お前さん何をしてゐなされる？」と言葉をしくれしました。すると、少女は、急に涙ぐんで申しました。「お母様が、此川の淵の主殿に捕られたのです。で、私は、此川の水を深へ干して、仇を討つてやるのです。」

「さうか、それは不憫なことだが、そんな小さな手で、とても此川の水が汲み干せるものではない。それよりも、仇は、此僧侶が討つてあげるから、これからは、たゞ、お母さんの冥福を祈つて上げなさい。」

かう言ひながら、淵の川縁に立つて、その旅僧が、何か呪文を唱へながら祈禱を始めますと、耳のある恐ろしい主殿が棲んでゐるといばれる淵の洞穴の中が、大變に騒がしくなつて、忽ち岩の裂けるやうな音響がしだし、洞穴の出口が、緩の太さより狭まつてしまひましたので、主殿は、二度と、その穴から出る事が出来なくなつてしまひました。

今でも、母川には長さ五六尺から一丈位の耳のある大蛇が棲んでゐるさうですが、例の岩穴に封じ込められた主殿の大きさは、もつ



### 聖と尿

昔々、おくらといふ少女が、路傍に、わが兒を寝かしつけて、田草取りに一生懸命になつてゐました。ところへ、知らぬ間に飛んで来た一羽の大鷲が、あれよと思ふ間に、眠つてゐた赤子を、ひよいとさらつて飛んで行きました。おくらは、驚いて、田より飛んで出で、解けかゝつてゐた皮引の片方だけ脱ぎ他の方方は脱ぎもあへず、大鷲を追ひにかゝりました。おくら、おつつかず、いとし兒を、邊々鷲の手から取返すことが出来ずに了ひました。それから、おくらは氣狂ひのやうになつて、わが兒を探し廻りましたが、その執心から、遂に鳥に化り、なほも、わが兒の行方を尋ねて歩きました。それでも見つけられないので、その子鳥孫鳥の代になつても、探し歩いて歩くのだといひます。上總國長生郡地方には、わけて此くらつこ鳥が深山に棲んでゐますが、くらつこ鳥の脚の、一方が白く、一方が黒いのは先祖のおくらが、あわてゝ皮引を片方だけ脱ぐ暇もなく驅出した名残であるといふことです。(上總國の話)

は、尿を堪へて行く方にする。」

「さうか、ぢやあ、己は、聖の荷を擔いで行かう。二人の神様は、お互ひに堪へつくらをして、歩み続けました。一日二日まではよごさましたが、三日四日となると、少彦名命の肩は、毎日の荷の重みで、堪らなくなつてくる。大己貴命は、尿を堪へる苦しさに、

「はあ、はあ。」と歎息つく體たらくでした。それでも、二人の神様は、堪へ忍んで、第五日六日と歩み續けて、今の播磨國神戶郡栗原村まで来ました時、大己貴命は、いかに堪へ切れなくなり、「あゝ、もう、わしは堪へられない。」と言ふ言葉の未だ終るか終らぬかに、シヤアと尿を垂れ始めました。丁度その時、同じやうに肩の荷に堪へられなくなつてゐました少彦名命も、「ばゝばゝ」と笑ひながら聖の荷を擔り出されて、

「然し、ほんとに苦しかった。」と、これも太息をつかれました。

其時、少彦名命が擔り出された聖の荷が崩れて、一塊の團となつたものが、今の豊岡里

だといふことです。其聖の大分部分は、大己貴命の尿のために、自然に掘られて直に岩となり、今に亡びずに跡つてゐるといふことです。(播磨國の話)

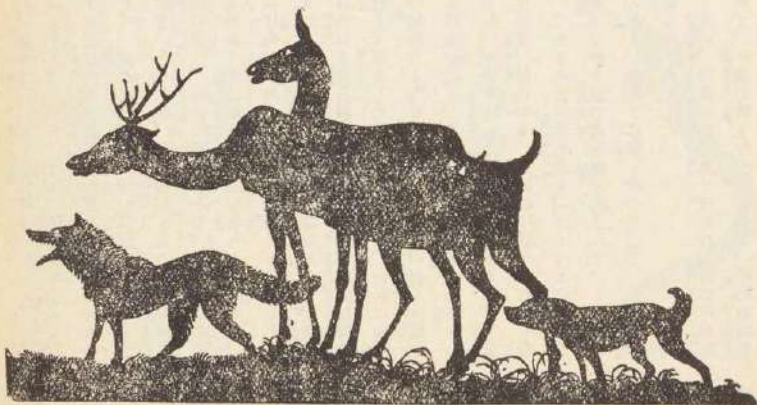
### くらつこ鳥

百舌鳥よりも少し大きい、一方の脚の黒い、



一方の脚の白い、くらつこ鳥といふ鳥は「クワツコ、クワツコ」と、何時でも悲しそうに鳴いてをります。





# 山六爺さん(九)

沖野岩三郎

三人の乞食は、誰も知らない間に、大將軍様の車も、副將軍様の車も、山六爺さんの車も、皆な此の山の裏の大きな湖の傍の杉の木の間引懸つてゐることを知つて居りました。婆アさんは乞食から其事を聞いて大變喜びました。婆アさんはそのお禮として三人の乞食の一人を總大將軍様にし、外の二人を右大將と左大將にしたいと、山六爺さんに相談しました。山六爺さんは、四十七人七疋を集めて、其事を申しました。誰も知らない間に夫れが解るとは本當に偉い乞食だと思つて皆な黙つて首を下げてゐました。

總大將軍様になつた乞食は狼の前へ出て行つて丁寧な頭を下げて「もし〜元の總大將軍様、今日から私が此の村の大將になりますから、あなたは私の家來になつて下さいませうか。」と言ひました。さうすると二疋の狼は、温順しく頭を下げて、「ウーウ、ウーウ。」と唸りました。



「御承知でございますか、夫れでは元の副將軍様、あなたも私の家來になつて下さいませうか。」と云つてクロの方へ頭を丁寧な下げました。

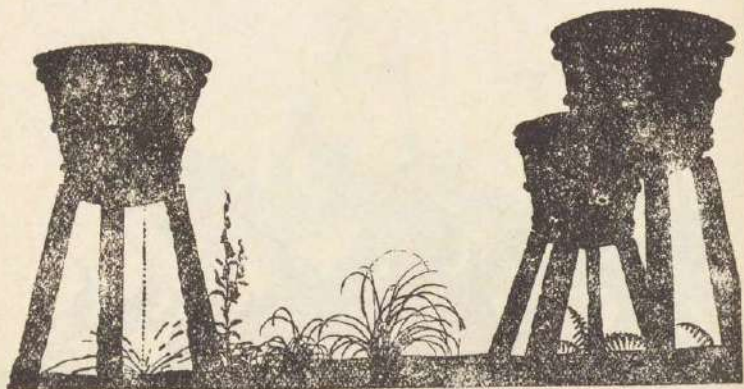
クロは合點の行かないやうな顔をして一寸乞食の顔を見上げました。夫れが、あア解つた〜と云ふやうに、「ワン、ワン。」と二聲吠えて尻尾をふりました。

「夫れでは皆さん……」と云つて乞食の大將は四十七人の王様と大名達と、夫れから山六爺さんと婆アさんとに對つて、「皆さんは今日から皆な私の家來になりますか。」と云ひました。

「なります、なります。」と皆なが聲を合せて言ひました時、二疋の鹿も、二疋の猪も皆な夫れを賛成したやうに大將を見上げておぼた。

山六爺さんは、恐る〜腰を屈めて、「もうし〜、あの四つのお乗物は如何致しませう？」と大將に尋ねました。すると大將は、



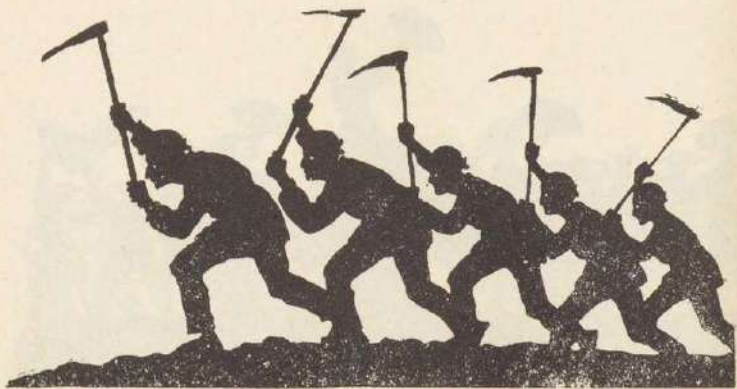


「さいますか。」  
「東の桶の水が無くなつた時は、其の桶の底がチーン！と鳴ります。さうすると皆な眠を覺して御飯を食べて、直ぐ働きにかゝるのです。それから西の桶の水が一滴も無くなつて、其の桶の底が、ガーン！と鳴るまで一生懸命に働くのです。」  
「御飯も食べないで？」  
「御飯を食べる時間は、水一合漏る間にきめてある。」  
「左様でございますか、では、其のガーン……から後は如何いたすのでございますか。」  
「西の桶が、ガーン！と鳴つたら、皆な家へ歸つて御飯を食べて、それから、南の桶がドーン！と鳴るまで、皆な學問を勉強するんだ。」  
「學問の先生は誰でございますか？」  
「天の事は右大將が教へ、地の事は左大將が教へ、人間の事は私が教へる。」  
「私は最う八十二歳でございますが、矢張り學問を勉強するのでご

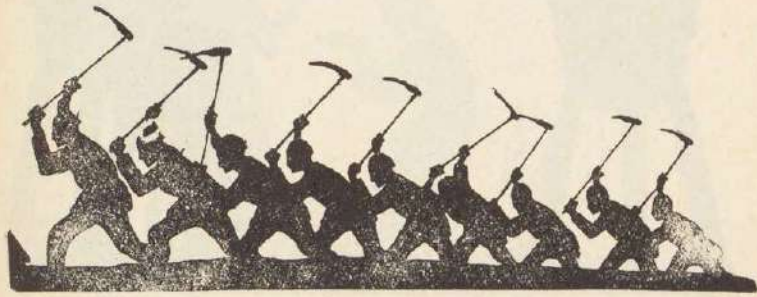


三回  
「あれは來年のお祭りまで、あアして放つて置きなさい！」と申しました。  
夫れから五十二人七疋は、ぞろ／＼と山六爺さんの家へ歸りましたが、其の翌る日大將は庭の四方に大きな桶を一つづつ据ゑさせました。そして其の桶には一杯水を盛つて、底に小さい穴を明けてありました。  
「大將様、この四つの桶は、どんな事にお使ひなされるのでございすか。」  
山六爺さんは腰を屈めながら尋ねました。  
「夫れは斯ういふワケだ、一日を四時に分けて、東の桶の水が皆な無くなるまでは、五十二人七疋はグウ／＼軒をかいて寝るのだ。」と大將が申しますと、爺さんは不思議さうに、  
「軒をかゝねばならないのでございすか、皆な揃つて？」と問ひました。大將は笑ひ乍ら、  
「さうだ、軒をかゝねばなりません。」と云ひました。  
「へエ、左様でございますか、それから西の桶はどうなさるのでご





「夫りや、チャーン！だ、疲ろく成るべく大きな軒をかいて、と云ひ乍ら蒲團の中へもぐり込みました。けれども狼と猪と鹿だけは寝ないで山の上に登つて行つて、  
「ウーウ、ウーウ。」と狼が唸りますと、クロは「ソン、ワーン。」と吠えました。猪はスーウ、スーウ、と鼻を鳴らしました。鹿の牡が「カイヨーウ：」と長く美しい聲で鳴きますと、牝鹿は「ヒーン、」と調子を合せました。そして最後に、ウーウ、ソン、スーウ、カイヨー、ヒンを一度に合唱しました。其の合唱が済むと七足は伴れ立つて、コト／＼コト／＼と村中を駆け廻つて、泥捧の來ない用心をいたしました。  
東の水桶が、チーン！と鳴ると同時に、五十二人の軒が、ピタリと止んで、皆な撥ね起きて、御飯を炊いたりお茶碗を洗つたり、食事が済むと、直ぐ湖の傍へ行つて、皆なが一生懸命に開鑿を始めました。狼もクロも猪も鹿も皆な土車を引張りました。三人の乞食も、皆な泥まみれになつて働きました。  
西の桶が、ガン！と鳴ると同時に、皆な湖で手足を洗つて、



「八十年になつても九十になつても知らぬ事は智はねばなりません。」  
「畏りました。其の勉強のすんだ後は、如何致しますのでございます。」  
「今度は北の桶の水が無くなつて、チャーン！と鳴るまで、皆なが一生懸命に仲よく遊ぶのだ。」  
「はア／＼解りました。東のチーン！まで寝て軒をかいて、西のガン！まで起きて働いて、南のドーン！まで學問を勉強して、北のチャーン！まで仲よく遊ぶのですネ。」  
「さうです、夫れでは早速明日から、あの湖水の傍の廣い／＼野原を拓いて、あれを立派な畑にしませう。」  
大將の言ふ事が、すつかり山六爺さんに解りました。それで其事を他の家來達に詳しく話して聞かせました。  
「夫れは面白い、明日からは能く寝て、能く働いて、能く勉強して、能く遊びませう。」と云つて皆な其の次の日待つてゐました。  
夕方北の桶の水が無くなつたので、皆な大あわてに、あわて、



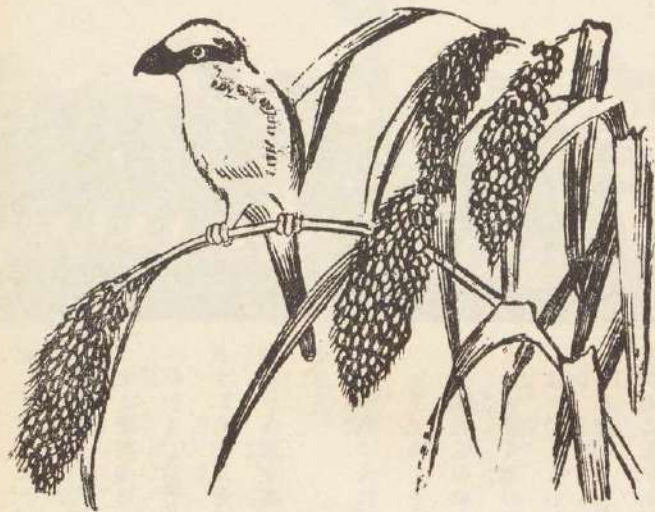


「さうれ、チャーン！」が鳴つたぞ。」  
と山六爺さんが言ふと、今まで夢中になつて遊んで居た五十二人七疋は、皆な家へ歸つて御飯を食べて、五十二人はグウ〜と駢のお稽古に取かゝり、七疋は山の上へ合唱に出て行きました。  
斯うしてチーン、ガーン、ドーン、チャーンが順序よく三年あ  
まり毎日々々繰返されてゐる間に、五十町歩の畑と、五十町歩の田圃とが出来た上、皆な身體が丈夫になり、天の事でも地の事でも人間の事でも、知らない事が無いといふ程の物知りになりました。  
そこで四年目の正月の元日に、隣村の人を千人、山六爺さんの家へ招いて、大變々々御馳走をしました。隣村の千人は御禮の爲めに、五十二人七疋を、爺さんが四年前につくつた大きな乗ものへ乗せて、長い〜綱を其の車につけて、湖水の周囲を静かに〜引張りました。  
山六爺さんは、齒は抜けて居たが歌は大變上手でしたから、  
とろり〜と、出た聲なれど……………  
風にとられた、川風に……………  
と面白く歌ひました。千人のお客様は、皆な、  
「はア、よいい、よいい、よいい…」と囁きました。  
今に毎年正月元日には、此の湖の傍で、其の通りの面白なお祭りがあるといふ事です。  
|| 永々お話を續けました、さやうなら！ ||



家へ歸り、四十九人を三組に分けて、總大將の乞食が人間の事を、右大將の乞食が天の事を、左大將の乞食が地の事を教へました。  
山六爺さんも、婆アさんも、伊豫の守い右衛門から周防の守す右衛門まで皆な一生懸命に勉強を始めました。  
南の桶が、ドーン！とトボケた音で鳴りますと、四十九人の生徒は嬉しさうに、皆な勉強を止して裏の小山に登つて行きました。  
ドーン！まで、グウ〜と寝て居た狼も鹿も猪も皆な裏山へ登つて来て、皆なと一緒に走りごつこをしたり、お相撲を取つたりしました。  
板をお尻に敷いて草の上をこつたり、樹の枝に攀ち登つたり、跳んだり弾ねたりして、皆なは仲よく遊びました。  
「さうれ、チャーン！」が鳴つたぞ。」  
と山六爺さんが言ふと、今まで夢中になつて遊んで居た五十二人七疋は、皆な家へ歸つて御飯を食べて、五十二人はグウ〜と駢のお稽古に取かゝり、七疋は山の上へ合唱に出て行きました。  
斯うしてチーン、ガーン、ドーン、チャーンが順序よく三年あ





### 百舌鳥が一羽

若山牧水

粟の畑で

百舌鳥が一羽

雀に真似して

啼いてゐたが

雀は来ぬので

ひろい黄いろい粟畑越えて

向ふの山にとんで行つた。



### 狐が化かされた話

齋藤 佐次郎

狐と狸は人を化かすさうですが、狸の方は化かし方が下手です。

ある時、田舎で大せい村の若衆が集つて賭事をしてゐました。すると、狸がどこからか出て来て其處らをうろく歩いてゐましたが、人聲がするのでそつと節穴から覗いて見ると、若衆が夢中で賭事をしてゐるので、

「やア、悪さをしてゐるな。悪い奴等だ、よし一つ化けてつて、あいつ等の金を皆なとつてやらう。」さう思つて様子をうかどつてゐました。

それには誰か村の者に化けて入らなければならぬのですが、しかし大勢の



るから、もしその中に本人がゐるはいいけないと思つてゐると、家の中では若衆の一人が勝負に負けただで、

「おれは、もう歸るよ。」といひながら戸を開けて外へ出て來ました。待ち構へてゐた狸はしめたと思つて、入れ代りにヌツと中へ入つて、あいてゐた蒲團の上にとつかり坐りながら、

「いま歸つたけれど、もう一番やりたくなつたからまた來た。」と、いひました。

若衆たちは、ひよいと見ると狸が坐つてゐるので、驚いてしまひ

「この狸めッ！」と、七八人の力のあるのが立上つて、ボカ／＼なぐつたので、可哀さうにたうとう殺されてしまひました。あんまりあわてゝ入つたので化けるのを忘れたのです。随分そゝつかしい狸です。

「おや／＼妙な事をするな。」と見てゐると、狐はボンと一つひつくり返つて、忽ち十七八の綺麗な娘に化けてしまひました。

「面白くなつて來たぞ、……オヤ何處かへ見えなくなつてしまつた。ぐづ／＼してゐる内に化かされるぞ、……よし、こつちで化かしてやらう。」

佐兵衛は先廻りするつもりで、すた／＼二三町やつて來ましたが、お婆さんのゐる茶見世があつたので、

「もし、お婆さん、今しがた十七八になる娘が通りはしなかつたかい。」と、わざと、大聲を出しました。

「いえ、お見かけいたしません。」

「ハテな、——實はね、私と一しよにお詣りに來たのだが、途中ではぐれてしまつたのだ。——この道を來る外に何處へも行く氣遣ひはないと思ふ

さて、佐兵衛といふ爺さんが王子の稻荷様へ參詣に行つた歸り道に、ぶら／＼あつちこつち歩いてゐますと、さびしい稻叢のところにヒヨッコリ尻尾が見えてゐました。どうも犬の尻尾のやうでないので、不思議におもつて、そつと近寄つてよく／＼見ると、狐に違ひないのです。

「フ、狐め晝寝をしてゐるな。」

よせばいゝのに、佐兵衛は惡戯すきな男でしたから、石を拾つてボンと投げました。

狐はいゝ氣持ちに寝てゐるところへ石をぶつけられたので、びつくりしてそのまゝ稻叢のかげへ入つてしまひました。佐兵衛は面白くてたまらないので、さて狐め何をするのだらうと不審に思ひながら、のび上つて見ると、蔭へかくれた狐が切りと頭へ草の葉をのせてゐるのです。

が。」といつてゐる處へ、

「もし、あなた、もし……」とやさしい聲で呼ぶ者があるのです。見ると、さつきに化けた狐なので、佐兵衛は「あぶない／＼」と心の中で思ひながら、

「おい、お前どこへ行つたのだい。すみ分探したよ。」と、なれ／＼しく言ひました。

「あら、私こそ探してゐましたよ。」と、狐もいゝ氣でいつてゐます。

「さうかい、私もさん／＼探したが、どうしても知れないので、若い者でも頼んで探させようと思つてゐたんだ。まアよかつた。丁度もう時分だから何處かで御飯を食べて行かう。」

佐兵衛がかういつたので、娘もその氣になつて、丁度向ふに見える笹屋といふ料理店へ上りました。その二階でいろ／＼と甘い物を誂へて、





お酒を取りよせました。一つ狐を酔ばらばせようと思つて、佐兵衛は自分で先づ一ぱい呑んでから、「さア、お前も一つお飲み…」と盃を出しました。狐は佐兵衛のたくらみを知りませんから、喜んで一ぱい呑みました。そこで佐兵衛は後から後から吞ませて、たうとうすつかり酔はせてしまつ

四四  
たので、狐は苦しくなつてそこへ倒れたかと思ふと、そのまゝいゝ氣持ちにすやく寝てしまひました。

佐兵衛は巧くいつたので、寢息をうかどひ下へ降りて来て、玉子燗を三人前お土産にあつらへましたが、それを持つて先へ歸つてしまひました。

### 三

可哀さうなのは後に残された狐で、ひいやりとしたので目を覺しました。酔もさめて、あゝいゝ氣持ちになつたと思ひ乍ら見ると、一しよに來た男がゐません。狐は驚いて女中を呼びましたが、「あの先程お歸りになりました。」といはれて蒼くなつてしまつて、

「あのねえさん、妙な事をお聞きしますが、お金はお拂ひして行きましたか。」と、きゝました。「いえ、お金はあなたからと仰いました。」

きな尻尾となつてお下りました。

何も知らない女中は、腰を抜してしまひ、階子段をころげ降りて来て、家の者にこの事を話しました。

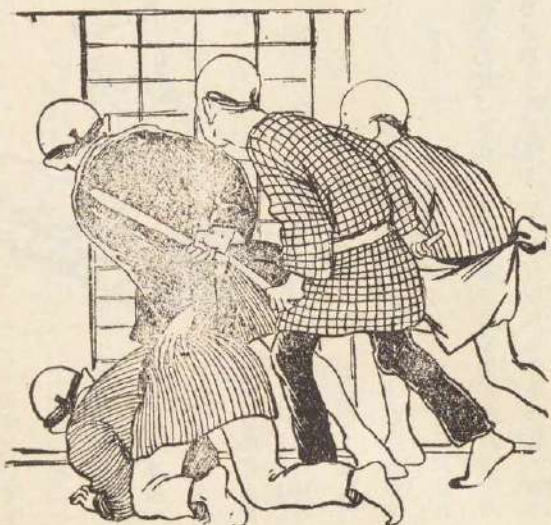
「たいへん。二階へ行つて下さい。」

と女中は、はアゝいひながら、今の客は夫婦狐で、かみさん狐だけが二階にあるのだと話したのです。

皆は本當にしませんでしたが、それでも若衆たちは面白半分に行つて見ると、成程女中がいふ通り狐が一疋ちやんと坐つてゐるのです。

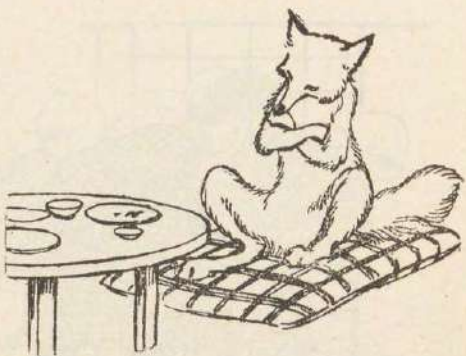
「ほんとに狐だ。畜生！ 狐なんぞに食ひ逃げられて堪るものか、打殺してやらう。」若衆たちは氣が早いものですから、てんでに、天秤棒や心張棒を持つて來ました。

狐の方では自分が姿をあらはしてゐるとは氣が



聞いた狐は膽をつぶして、思はず、「えーッ。」と叫びました。さすがに狡猾な狐もその時ばかりはあわてたのです。今まで綺麗な娘だつたのが忽ち耳を出して、後へ結んでゐた帯が大





つかず考へこんでゐたのに、いきなり大勢かとびこんで来て、不意打ちをされたから堪りません。座敷の中を逃げ廻りました。どい目にあはさ

四

れました。それでも幸と障子のすき間があつたので、そこから飛出して命から一く自分の巢へ逃げもどりました。

さて佐兵衛の方はまんまと狐をだまして、三人前の玉子焼を待つて、いゝ氣持ちで歸つて来ました。

だが、道で家主の金兵衛さんにあひました。

「佐兵衛さん、いゝ氣嫌だね、何處へ行つたのだい。」と金兵衛さんがきいたので、佐兵衛がすつかりの話をすると、金兵衛さんは大變おどろいて、

「佐兵衛さん、それはとんでもない事をおしだね。狐は昔から稻荷様のお使だといふ位だ。お詣りにいつて狐をだましたりしては、それこそどんなにお稻荷様のお怒りにふれるか解らない。もしその兎も角も、子供衆やおかみさんにどんな祟があるか知れたものぢやない。」と、いひました。

いたづら好きの佐兵衛も、いはれて見ると成程と思つて、急に神經を起して恐くなりました。その日はそのまゝ家へ歸りましたが、その晩はうなされ通してろく／＼眠らずに明しました。

翌朝佐兵衛は、夜の明るのを待ち兼ねて家をと

び出したのです。色々の土産物を買つて王子へやつて来ました。この穴の狐がわからないので、方々の穴の前へ行つてはうろ／＼してゐました。その内に稻荷様の傍の小さな鳥居のある處へ来ました。丁度そこに奥深い穴があつたので、中の様子を窺ふと苦しうな唸き聲が聞えました。

「あゝ此處に違ひない。昨日はひどくやられたのだな。」さう思つて佐兵衛は「御免なさい。御免なさい。」と、どなりました。

中から白い小狐が出て来ました。

「フ、これはどうも面白い。昨日の狐の子供だな。」さう思ひながら佐兵衛は、「あゝもし、あなたはこちらの坊ちゃんですか、嬢ちゃんですか。へゝ坊ちゃんで……どうも結構なお毛並ですな、えゝ一寸伺ひますが、昨日ひどい目にお遇ひになつたのは、あなたのお母さんでせうか。あの實は

私は昨日其化かしました人間でございますが。」佐兵衛は地面に坐つて、ペコペコお饗儀をしながら、「まことに濟まない事をいたしました。つひふらふらとあんな氣が出ましたので、これからは決してあんな悪戯をいたしません。どうぞ御勘辨下さいますようお母さんに仰つて下さい。」と平あやまりにあやまつて、土産にもつて来た牡丹餅の包を出しました。小狐は子供だけに世の中の事は何もわからないので、いゝものを買つたと思つて、くはへて中へ入つてしまひました。

五

穴の奥では親狐が、昨日ひどくぶたれた痛みのためにうん／＼唸つて倒れてゐました。

そこへ小狐が何か口にくはへて来て、

「あのね、昨日お母さんが化かされた人間が来たよ。」と、いふのです。





「エー来たかえ、まア呆れたやつだ。」

親狐は口惜しくて堪らないので齒ざしりし乍ら  
ひよろ／＼立上つて外の方をにらみつけました。

「でも何だか大變にあやまつてゐたよ。どうも悪かつたから勘忍してくれつて。」と小狐がまたいひましたが、親狐は昨日でこりてゐるので、  
「そらく／＼しい奴だ。出るんぢやないよ。」  
といつて、取りあはうとしません。

「でも大變にあやまつてゐるんだよ。それからこれはお詫びのしるしだと言つて、何んだかくれたよ。」さういつて小狐が、包のやうなものを出したので、開けて見ると、たくさん牡丹餅が出ました。  
親狐はちつと見つめてゐましたが、

「白や、食べるぢやない。それはきつと馬の糞に違ひないよ。」と、佐兵衛に聞えるほどの大聲でいひました。そして、たうとう穴の外へ出て來ませんでした。

さて、その後はどうなつたか、つい聞いて置くのを忘れしました。(をほり)



童話  
歌劇

王様とパン

(禁無断作  
曲及興行)

小林愛雄

登場人物

王様 (ある國の)

おかみさん (百姓家の)

家來

歌ひ手

大勢の家來

此處は寂しい田舎の百姓家、おかみさんは食卓の上で、一生懸命に粉を捏つてゐる。  
王様は燧燵にあたつて、黙つて、考へ込んでゐる。王様は戦争で大敗にまけたので、この家へ逃げこみ、王様とは知らせずに、一月あまり厄介になつてゐる。  
その時、遠くから兵隊の歌が聞えて来る。

(うた)



兵隊の歌。

瓦に霜が

巢をつくりあ、

帽子も靴も

ひびだらけ。

枯野に雪が

はびければ、

喇叭も剣も

凍りつく。

(言葉)

王様。(歌を聴き乍ら) また誰か兵隊の歌をうたつ

てゐるな。

おかみさん。さあ、今晚おいしい物が食べたか

つたら、さう火の傍に考へ込んでゐないで、手傳

はなけりあ駄目だよ。これが晩の御馳走だからね

え。お前さん聞いてゐるのかい。——パンを焼く  
にあ見張りをするのが肝心だよ。焼けてゐる間み  
はりをするのが——わかつたかえ？

王様。(夢を見てゐるやうに) うむ——はい、はい——  
焼けてゐる間におはりをする——

おかみさん。おはりだつて？ 私はみはりと云  
つたのだよ。本當に此の人は、半分眠てゐるのだ  
ね。しつかり目を覺まして、よく聴いておくれ！  
パンは直きにこげるものだから、確かり見張りを  
しなけりあいけないよ。(と擲粉を四つかたまりに擲める)  
それに見張り番はお前さんしかないのだから。

王様。(夢を見るやうに) わたしが——？

おかみさん。さうだよ、なにわけもない事さ、

さうやつて始終火を見てゐるのと同じやうな事な

のだから。その間に私にはうんと用がある。豚や

鶏に餌をやつたり、羊の世話をしたり、外にも

澤山の仕事がある。あ、忙しい。こんな、らく  
ら者に大事のパンを頼んでおくのは嫌だけれど、

どうしたつて時間の繰合せがつきはしない。

王様。おかみさんの代りによく見張り番をしま

すよ。

おかみさん。(鍋を火にかける) これでよしと。い、

かね。パンは褐色にならなけりあ、けれど褐色に

なり過ぎないやうにね。それから片方が焼けたら、

引つ繰り返すのだよ。そら器用に。こんな工合

に——(とやつてみせる)

王様。はい、はい、やつてみませう、御安神な

さい。

おかみさん。火が強いだから、氣をつけない

とこげるよ。お前さん、一寸でも、ほんの一寸で

も目を離してはいけない——お前さん、聞いてゐ

るのかい？ うつかりして居ると、今晚、空腹で

寝ることになる。大事な食物を無駄にしては大變  
さ、こんな寂しいところで。

王様。(獨り言のやうに) さうだ、寂しいところだ。

非道い場所だが、隠れてゐるには大丈夫な所だ。

おかみさん。(左の戸口へ行つて) ちあ、氣をつけて

ね、うつかりすると、みんなひどい目に逢ふよ。

(奥へ行つて仕舞ふ)

王様。(獨り言) うつかりすると、みんなひどい

目に逢ふ——つて、その通りだ。あ、この大事な

國！ 可哀相な人民！ おまへたちは亂暴な敵の

ために、踏み破られて居る。

(うた)

王様の歌。

いくさは負け、

兵士は散り、





食べて寝て、  
 それでお禮に  
 何くれた？  
 ひとつきあまり  
 火にあたり、  
 それで仕事は  
 何をした。  
 大事なパンを  
 黒焦げに！  
 晩の御馳走  
 だいなしに！

(おかみさんは王様の顔なびしやんと打つ、と、  
 るへ王様の家來が喉ひ手なつて入つて来る)

(言葉)

國はみだれ、  
 人はやつれ、

わが國危し、  
 わが民危し。

(言葉)

王様。(立ち上る)けれど、生命のあらん限り――

(うた)

兵士を呼び、  
 いくさに勝ち、

國を救ひ、  
 人を助け、

昔にかへさう、  
 平和のむかしに。

(言葉)

おかみさん。(怒つて入つて来て、火の前に驅けつける)あ  
 こげた、真黒焦げだ――向ふまで焦げつく香ひが  
 した位だから(とパンを出して)――まあ、こら、印  
 度人の顔よりまだ黒い！ お前さん、本當に冗談  
 ぢやありませんよ。――だが、お前さんに任せて  
 置いたのは馬鹿だつた――けれど、こんなに焦が  
 したお前さんは猶馬鹿だ。まあ、ごらん！ この  
 やくざもの！ 餓死んだ方がました。大事な食物  
 を焦がして、一寸引つ繰り返へしもしないで――  
 この野郎め！

(外に戸を叩く音がする)

王様。ありあ何だらう？

(うた)

おかみさんの歌。(怒つてうたふ)

ひとつきあまり



おかみさん。もうお前さんには用がない。さ、  
たつた今、出て行くがい、この野郎！

王様。やあ、まちこがれて居つた。戦の様子は  
どうか。

家來。わが君、首尾ようございます。

おかみさん。(口をあいて) 何、わが君だつて！

あきれてしまふね。

歌ひ手。(膝まついて王様の手を接吻し乍ら) まあ、陛下、  
御無事で御芽出度う存まじす。

おかみさん。えい？ 陛下だと？ これは氣狂  
ひだね？

王様。首尾よといふ知らせを話してくれ。私  
は何も知らないのだ。

家來。敵の大將が死んだので御座います。

王様。萬歳だな！

歌ひ手。そこで敵の旗を奪ひました。此處に御

歌ひ手。かしこまりました。

(うた)

歌ひ手の歌。(楽器に合せてうたふ)

王様、王様、

かちいくさ、

味方が弾丸の

嵐を起しあ、

桐の葉のやうに

逃げる敵。

王様、王様、

かちいくさ、

味方が劍の

夕立降らしあ、

芝の葉のやうに

なびく敵。

座います。(と敵の軍旗を王様の前に出す)

家來。敵は亂暴にも、方々の町に火をつけて攻  
めて参りましたが、たうとう隣りの國の城で敵の  
大將は運の盡きとなりました。

歌ひ手。味方の兵隊は少いながらも一生懸命  
勝たうか勝たなければ死なうと心を決めました。

王様。(持ち切れない様子で) 左様か、それから――  
家來。そこで味方は夜の暗にまぎれて敵を攻め

かけ、敵軍を残らず捕虜に致しました。敵の大將  
は殺され、旗は味方に取られましたから、敵は最  
早どうする事も出来ませぬ。

歌ひ手。もう敵には旗がなくなりました、味方  
にはこれから好い運が向いて参ります。王様、私

は勝利の歌を作りました。

おかみさん。(大驚きで) 王様だつて！

王様。その歌を歌つてごらん！

(言葉)

王様。胸が透きとほるやうだ。褒美に手製のバ  
ンを取らさう。

歌ひ手。(バンを戴いて) 王様が貴い御手製のバン  
有難く頂戴いたします。

王様。好い運が向いて来たやうな。では、お前  
たち二人は、別々の路をたどつて、勝利の知らせ

を國中に傳へるがい。さうして私が無事にもう  
一度位に即くことを知らせてくれ。

おかみさん。王様！ バンをお焦がし遊ばされ  
た王様！ お許し下さいませ。此の云ふことを聞

かない手が、王様の頬を打ちました――まあ、私  
はどうしたらよからう！

王様。(微笑み乍ら) 此の善いおかみさんが何週間  
も私をかくまつて呉れたのだ。

おかみさん。(膝まついて) 王様、どうぞ、お許し



下さいまし。

王様 何許すことがあらう。許してもらいたいのは私の方だ。私はつひお前のパンを焦がして仕舞つた。けれども心配しないがい、おまへに金貨をとらせるから。長い間のお前の親切を、私は有難く思ふぞ。(おかみさんを起させて) 私ののらくらしてゐたのが、お前の氣に入らなかつたのは尤もだ。それはさうと、家來たち、早く出掛けようではないか。時間が大切だ。(戸の方へ行きかけて) これから色々な事をしなければならぬ。

家來。(戸の方を向いて) 皆の者仕度はよいか。

大勢の家來。よろしうございます。(と、大勢出て来る)

(うた)

一同合唱。

風はなぎ、

雨は晴れ、

虹が出た空に

五色の虹が。

夜は明け、

朝が来る、

赤い日が空に

いちめん光る。

萬歳、萬歳、

王様萬歳、

萬歳、萬歳、

わが國萬歳、

萬歳、萬歳。

# 菊畑

前田林外

父さんとうから 菊ばたけ

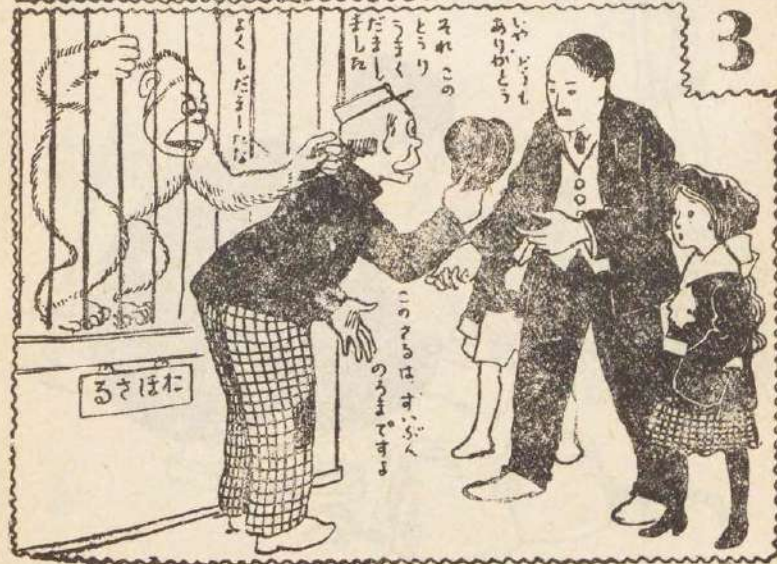
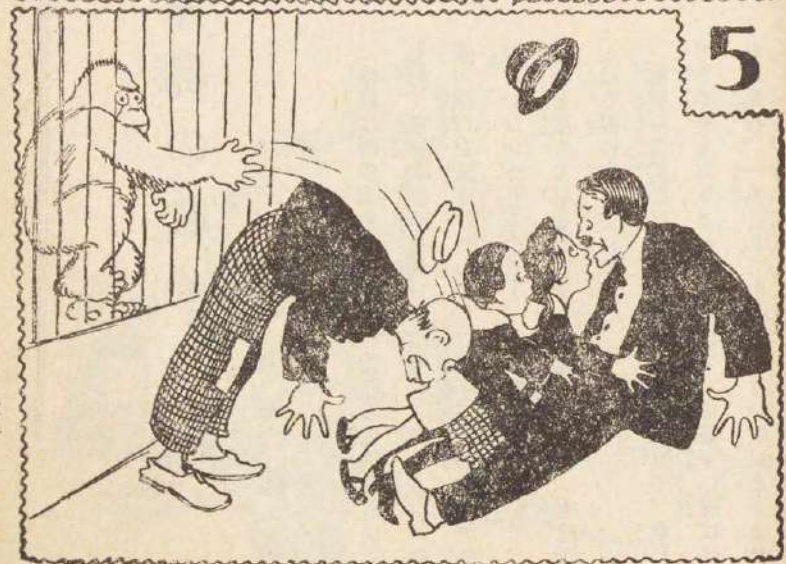
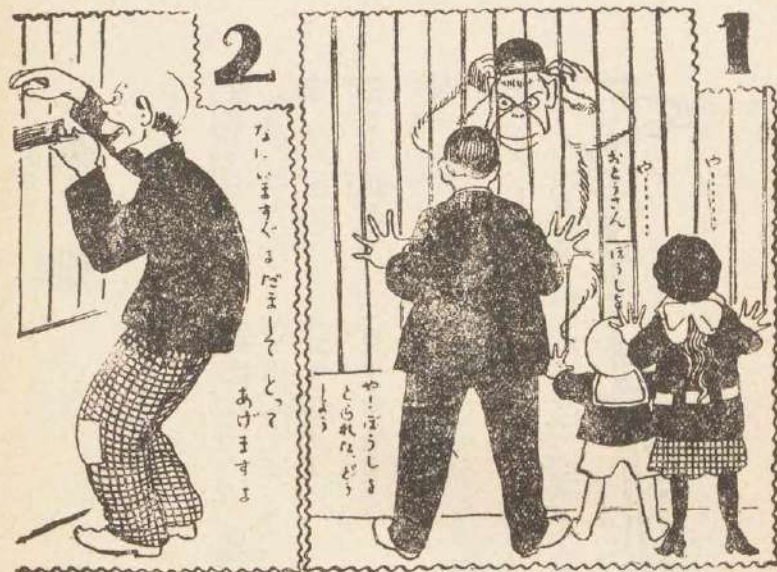
霜よけ造つて おいでたわ

母さん鴉が 見てゐます

柿一つやるから 一寸お啼き











## 屋島の戦

(後篇)

窪田 空穂

平家の方では、敵は七八十騎の小勢に過ぎなかつたと分ると、ひどく残念がらしまして、宗盛は、「能登守(教経)は居ないか、陸へ上つて」と軍なさい。」と命じました。

「畏りました。」と、教経は、越中盛嗣を第一にして五百人ばかりで小船に乗つて、焼き拂はれた御所の正門前の渚へ寄せて陣を取りました。

義経の八十餘騎もそれに向つて、矢の届き加減の所へ陣取りました。

盛嗣は船の上から大声で、義経の悪口を云ひました。義経の家來は負けてはゐず、代るゝに平家の悪口を云ひかへしました。今、金子十郎が悪口をいひかへしてゐると、弟の與一は、強弓で、盛嗣を覗つて射ました。矢は盛嗣の胸へ、脊までとほる程に中りました。

能登守(教経)は、平家第一の強弓引きで、そして上手でもありました。それで、能登守に覗はれたが最後、一人として射殺されない者はありませ

んでした。今日は能登守は、何うでも義経を射殺さうと覗ひました。源氏の方でも、それと知つて、伊勢義盛、佐藤嗣信、忠信、武藏坊辨慶などが、義経の前へ馬を並べてゐたので、能登守も何うすることもできず、「そこを逃げ、雜人ども」と云ひながらも頻りに弓を引くので、十騎ばかりの者が射落されました。佐藤嗣信は、左の肩から右の脇腹へ射抜かれて、馬から倒になつて落ちました。

能登守の家來で、菊丸といふ十八の若武者が、嗣信の首を取らうと飛びかゝるのを、嗣信の弟の忠信は、菊丸を射ました。能登守は、左の手に弓を持つたまゝ、右の手だけで菊丸を掴んで、自分の船の中へ投げ入れました。

義経は、嗣信を、陣の後の方へ昇ぎ入れさせて、急いで馬から下りて、その手を握つて、

「何んなだ三郎兵衛。」と尋ねますと、嗣信は、





「もう駄目です。」と答へました。

「何か言ひ残したいことはないか。」

「何がございませう。ですが、貴方の御盛んになる所を拜見せずに死ぬのは心残りです。それさへなければ、武士が敵の矢に中つて死ぬのは、覺悟の前です。それ所ではなく、源平の屋島の戦に、奥州の佐藤嗣信といふ者が、主の身代りになつて死んだと後々までも云はれるのですから、身に取りつて、この上もない名譽だと思ひます。」

さう云ひながら次第に弱つて行きました。義經は強い大將ではあるが、いかにもかはいさうに思つて、鎧の袖を顔にあてゝ泣きました。

義經は、後の甲ひをしてやりたいと云つて、僧を捜し出して、甲ひの禮に、轡越を乗つて越した馬をやりましたので、それを見た家來たちも涙を流して有難がり、「この君の爲に命を棄てるのは、

「射ろといふのでせう、射させたが宜しうございませう。」と基實は答へました。

「身方で射得る者は誰だ。」

「上手も大勢をりますが、下野の那須與一宗高がいゝやうです。」

「上手な證據があるのか。」

「さやうでございませう。飛んでゐる鳥を、三羽に二羽はきつと射落します。」

「それなら、與一を呼べ。」といつて、義經は與一を呼びました。

與一は二十歳ばかりの、小柄な男でした。出て来て義經の前へ畏りました。

「與一、あの扇の真中を射て、敵に見物させてやれ。」

義經がさういふと、與一は、

「出来ようとは思はれませんが、若し外しますれば、

少しも惜しくはない。」と云ひあひました。

二

その日も夕方になりました。今日は勝負がつかないといつて、源平兩軍とも後へ退きました。その折から、綺麗に飾つた船が一艘、沖の平家の軍から離れて、陸の源氏の軍の方へ漕ぎ寄せて來ました。そして渚から小一町ばかりの所まで來ると、船を留めて、横向きにしました。あれは何うした船だらうと怪んでゐると、船の中から、十八九ばかりの、白い着物に紅ゐの袴をはいた女があらはれて、眞紅な地へ金で目を描いた扇を竿の先へ附けて、船の縁へ立てました。そして陸の方へ向いて手招きをするのでした。

義經は、後藤基實を呼んで、

「あれは、何ういふわけだらう。」と尋ねますと、

長く御弓矢の庇にもなることとございませう。きつと仕おほせませう者においひつけ下さいませうように。」と云ひました。義經は怒つて、

「今度鎌倉から此方へ來た程の者は、義經のいひつけを背くことは相成らん。少しでも苦條をいふ者は、直ぐに鎌倉へ歸つてしまへ。」

與一は、この上斷つては惡からうと思つたと見えて、

「それでは、外れるかも知れませんが、おいひつけでございませうから、致して見ませう。」と云つて、義經の前を下り、黒い大きな馬に乗つて、弓を持つて、手綱を繰りながら汀の方へ歩ませてゆきました。

身方の者は、その後姿を遠くまで見送つて、「あの若者は、きつと仕おほせさうだ。」といふので、義經も頼もしく思つて見ておきました。





汀へ立つた與一は、少し遠過ぎると思つたので、馬を海の中へ入れて、少し近寄りましたが、それでもまだ可なりの距離がありました。時は三月中旬の夕方のことでしたが、折から北風が烈しく吹いて、岸の彼は高くあがりました。船はゆれ上り、ゆれ下りするので、竿の上の扇はひら／＼と通してゐました。沖の方では平家が船を並べて見物してゐる。陸の方には源氏が馬を並べて見てゐます。いかにも晴れの場所でした。與一は眼をふさいで、「南無八幡大菩薩、別しては故郷下野におはす日光の権現、宇都宮那須湯泉の大明神、願くはあの扇の真中を射させたまへ。これを射そこなふと、弓を折り、自害をして、人に顔を合せなくする外はありません。今一度、故郷へ歸してやらうと思召すならば、何卒この矢を外させたまふな。」と心の中で

念じて眼をあくと、風が少しは鎮まつて、射よさうに見えました。與一は、鎗矢を弓に番へて、引絞つて、ひゆつと放しました。鎗矢は海の上に響を立てながら飛んで行き、扇の要から一寸ばかり上の所を射切りました。鎗矢は海に落ち、扇は空へ舞ひあがりました。そして春風に一揉まれ二揉まれして海へさつと落ちました。真紅な扇が夕日に輝いて、白波の上を漂ふのを見て、沖の平家は絃を叩いて褒めました。源氏は箆を叩いて褒めました。

## 三

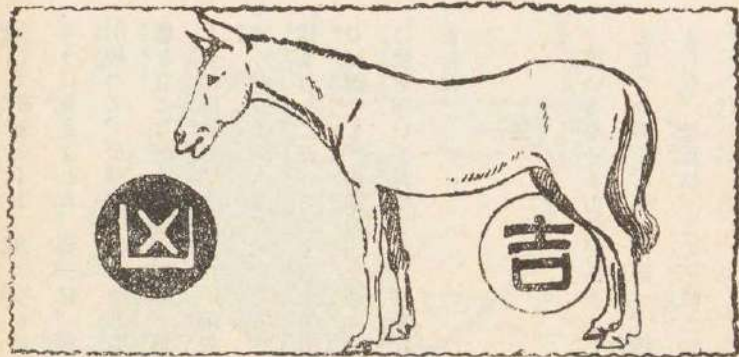
續いて小せりあひがありました。今は全く夜となつたので、平家は沖へ、源氏は野へ陣を取りました。源氏は、この三晩といふもの寝なかつたので、人も馬も疲れきつて、ぐつすと寝てしま

ひました。しかし義経と、伊勢義盛とは、夜討を案じて寝ずに番をしました。平家の方では、その晩夜討をしようとしたのですが、先陣争ひをしてゐる中に夜が明けてしまつたのでした。夜が明けると、平家は志度浦へ退きました。源氏は追つて行きますと、平家は敵の小勢なのを見て、引返さうとしました。

その折から、屋島に残つてゐた平家の二百餘騎が驅けて来るのを見て、平家は、敵の大軍だと思つてしまつて、又船へ乗つてしまひました。今は四國は取られてしまふ、九州へは行けず、行く所もないやうに見えました。

その日、大阪に残つてゐた二百艘の船は、梶原を先として屋島へ着きました。軍は濟んでしまつてはゐたが、その爲に源氏の方は益々力強くなつて來ました。(長篇歴史童話の内「屋島の戦」をかり)





支那伊蘇普物語 (五)

楠山正雄

(一) 塞翁の馬

むかし支那の北の果ての、もう外國の胡の國に近い塞といふ所に、塞翁といふおぢいさんが  
 ありました。或日このおぢいさんの可愛がつてゐた馬が、ひよつこりどこかへ行つてしまつた  
 ので、近所の人たちは「やれ、やれ、おぢいさん、お氣の毒だれえ」といつて、お見舞のあいさ  
 つをのべますと、おぢいさんは首をふつて、  
 「いや、どうしてお氣の毒なものか。これがかへつてしあはせにならぬとは限らないよ。」  
 といひました。すると、それから半年ほど立つて、ぬなくなた馬が、或日ひよつこり歸つて  
 来て、おまけに友だちだと思つて、もう一匹の、それは立派な胡の國の馬を一しよにつれて來  
 ました。近所の人はこの話を聞いてまたおぢいさんの所へやつて来て「おや、おぢいさん、  
 とんだうまいことでしたれえ。」といひますと、おぢいさんは首をふつて、  
 「いや、これがかへつてふしあはせにならないとも限らないよ。」といひました。  
 さて、おぢいさんの息子が、大そうこの胡の國の馬を好いて、毎日々々おもしろ半分野や山  
 をのりまはしてゐましたが、何しろ氣の荒い外國の馬ですから、或日息子はたうとう馬からふ  
 り落されて、兩脚の骨をくちいて、かたわになつてしまひました。けれどもおぢいさんは、  
 「いや、どうして、これがかへつてしあはせにならないとも限らないよ。」といひました。  
 それから一年立つて後、胡の國の兵隊が大勢塞の土地に攻め込んで来て、ひどい亂暴をばじ  
 めました。土地の若い者たちは、こゝろす兵隊に驅り出されて、劍や槍や弓矢をもつて敵に向ふ  
 ことになりました。けれども胡の兵の勢ひがなかり強くつて、兵隊に出たものは大たい討死  
 してしまひましたが、駈になつた塞翁の父子だけは無事で、いつまでも永生きなりました。

(二) 愚公の山



むかし北山といふところに愚公といふ人がありました。その住んでゐる村の前に太行山とい  
 ふ恐ろしい大きな山があつて、邪魔をしてゐるので、この村にはよから人がたづねても來な  
 いし、こちらからもその村へ遊びに行くこともできませんでした。愚公はいかにもそれが残念  
 であつたので、もう九十歳つといふ年寄でしたけれど、或時子供や孫や兄弟たちをのこらす  
 呼びあつめて、  
 「一ばんお前たちと力をあはせて、あの太行山を崩して、平山にしてやらうと思ふ。」といひま  
 した。みんなは手をうつて、  
 「それはいふ思付です。まつそく明日からかゝることにしませう。」といひました。その中で一  
 人愚公の娘だけが首をふつて、  
 「馬鹿なことないふ人たちですれ。庭の築山一つだつてなかく、崩すには骨がをれるのに、あ  
 の高い山がどうして崩せるものですか。それに崩した土や石ころの始末をどうするつもりでせ  
 う。」といひました。  
 「なあにそれは海の中へ運んで行つて明けるだけさ。」と愚公は平氣な顔をしていひました。そ  
 こでそのあくる日から、愚公は一家眷族をのこらすひきつれて、太行山の上を崩しては、もつ  
 こや、旅で根氣よくそれを海まで運んで行きました。すると近所に智叟といふ老人があつて、  
 愚公が山を崩すのを見物して、笑ひながら、  
 「お止しなさい。お止しなさい。お前さんがこれから生きてゐる間かゝつてもこの山の上の草  
 一本でも抜けるものではないよ。」といひました。すると愚公は手をふつて「いや、お前さん  
 もわからない人だな。わたしの一生に崩せなければ、わたしの子が崩してくれる。その子の一  
 代にできなければ、孫が崩してくれる。こちらは子供に子供が生れて、いくらでもふえて行く  
 けれど、山の高さは少しも増しほしないのだ。」といひました。智叟はあきれ顔をして、黙つ  
 て行つてしまひました。どんなむづかしい爲事でも、この位氣をながかまへてかゝれば成し  
 とげられないといふものはありません。





## 劍術のお弟子 (推薦)

島田國子

むかし、江戸の町に町道場を開いてゐる一鐵齋といふあんまり名人でない劍術の先生がいました。この先生の處へ稽古に来るものは大抵商人や職人ばかりで、いづれも面白半分にくる連中でしたが、その中に少しのろまな三五郎といふ男がありました。三五郎は武者修行の話をきいて自分も是非一度やつて見て、山賊や追剽に出あひ、自分の腕前をあらはしたいものだと思つてゐました。それである日の事、先生の處へやつて来て、

「先生、今日は相談があつて來ました。外でもありませんが、劍術は武者修行をしなければ腕が上らないといひますから、私もこれから一ばん出かけようと思ひます。どうぞお免許を下さい。」

先生はびつくりして、

「三五郎殿、あなたは商賣を止めて劍術使ひになるお考へか。」と、ききました。

「はい、勿論武藝をもつて世渡りをする考へです。」

「いや、大層なお望みだな。しかし武者修行とい

ふものは、なか／＼艱難苦勞の多いものです。あなた方がのんきに考へるやうなものぢやない。それに就て思出した事があるから一つお話ししよう。」

かういつて、先生の一鐵齋が、嘘だか本當だかわからない次のやうな話をしました。

「それは丁度十年前のことだと思ふ。私は武者修行をしながら上州のある町へさしかつたのである。ところが、もう夕暮方なので、宿をとらうと思ひ町はづれまで來ると、そこに一軒の居酒屋があつた。大勢人だかりがしてワア／＼騒いでゐるので、何か酔漢が喧嘩でもしてゐるのぢやないかと思つて、大せいの人の後へ立つて様子を聞いてゐるとさうではない。宵だといふのに盜棒が入つたらしいのです。ところがそれが普通の盜棒ではなく浪人者の武士らしく、しかも大勢ではなかつた

だ一人ださうで、見世の者をおどかして土藏の中へはいり込んだので、中で氣のきいた者がいきなり土藏の戸を外からしめてしまつたのです。

そこで召捕らうといふ事になつたのだが、なか／＼なか藏の中へとび込もうといふ者がない。たゞ外でワア／＼騒いでるばかりです。土藏の中では盜棒が刀を抜いて、戸を開けたら斬り殺さうと待ち構へてゐるからどうする事も出来ない。私はあまり見るに見兼ねたので、人を押分けて中へ入つて行つて、遂に召捕つてやる事にしました。が、しかし、いよ／＼それをやるには戦なればで腹のへらぬよう先づお腹をこしらへてかゝらなければならぬから、主人にいひつけて夕飯の支度をさせました。それから十分に食べて、さアいゝとなつたので、身支度をして刀を抜いたが、ふと考へた事があつた。戦ふにしても盜棒を殺してしまつて



は何にもなら  
ないから、な  
るべく生捕り  
にしてやらう  
と思つて、炭  
俵を二俵とり  
よせたのです  
それから若衆  
にいひつけて  
土藏の戸を開  
けさせ、いき  
なりその俵を  
土藏の中へ投  
げこんだのです。盗棒の方では血迷つてゐるとこ  
ろへ、俄かに明るなつたので、入つて来たものを  
人間と思つて、いきなり斬下したから、そのすき



七〇  
に私がとび込ん  
で行つて、襟首  
をつかまへて  
表の方へ投げつ  
け、事もなく召  
捕つてしまひま  
した。それから  
私は、その町に  
足を留て、土地  
の者に剣術を教  
へてやつたが、  
そのとき私であ  
つたればこそ、  
やすくと盗棒を捕へたものゝ、兎に角腕の出来  
た上でなければ武者修行など思ひもよらない事て  
す。」

二

三五郎は先生からながくと手柄ばなしを聞か  
されて、折角の自分の望みを許してもらふ事が出  
来なかつたので、大變に不平に思ひました。何か  
自分もその内にうまい事にぶつかつて腕前を見  
せ、先生を驚かしてやらなければならぬ、と考  
へながら歸つて来ました。

すると丁度日の暮れ方で、居酒屋の前まで来る  
と、人が黒山のやうにたかつてゐるのです。三五  
郎は今しがた聞いた先生の話を思出して、

「何だ、盗棒か。」

とどなつて驅けて行きました。

「お、三ちゃんかい、なに酔漢なんだよ。」

と、居酒屋の亭主はいつて、困つたやうな顔をし  
てゐました。

「酔漢：フ、その酔漢が盗棒をしたか。」

「さうぢやないよ。酔漢がお武士に喧嘩をふつか  
けたんだよ。それでお武士が怒つて、刀の鞘で一  
打ち食らはしたものだから、酔漢の奴承知しない  
で事が面倒になつたのだ。それでお武士の方は酔  
漢にからかつても仕方がないと思つて、一時家の  
土藏へかくれてしまつたのだ。」

「しめた。三五郎はたまげるやうな大聲を出して

「よし、その武士を己が召捕つてやる。」といひま  
した。そしてもう樽を十字にかけて支度をはじめ  
たので、居酒屋の主人はおどろいて、

「三ちゃん、じやうだんぢやないよ。何にも召捕  
りにする事はないぢやないか。」

「餘計な事をいつてくれるな。日ごろの腕前を見  
せるのはこの時だ。亭主、夕飯を持ってきてくれ。」

「あれ、氣がどうかしたよ。」

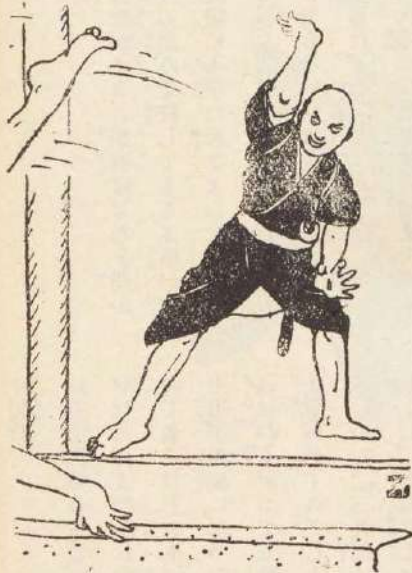


さういひながらも居酒屋の亭主は、商賣なので夕飯を持つて来ました。

三五郎は飯を七杯、汁を三杯お代りさせて、いよ／＼お腹が苦しい程一ぱいになったので、

「御亭主、まことに申兼ねたが、炭俵を二俵持つて来てくれ。なに、どうするんだつて、何んでもいゝから持つて来てくれ。これが生捕の計略なのだ。」と、頼むもの

ですから、今度は居酒屋の亭主も薄のろの三五郎が何を仕出來すかと面白半分の氣持ちになつて、若衆にひつけて炭俵を二俵持つて來させま



した。

「これはどうも辱けない。これさへあればもうこつちのものだ。」

三五郎は大得意で、二俵の俵を重さうに荷いで土藏の前まで行きましたが、

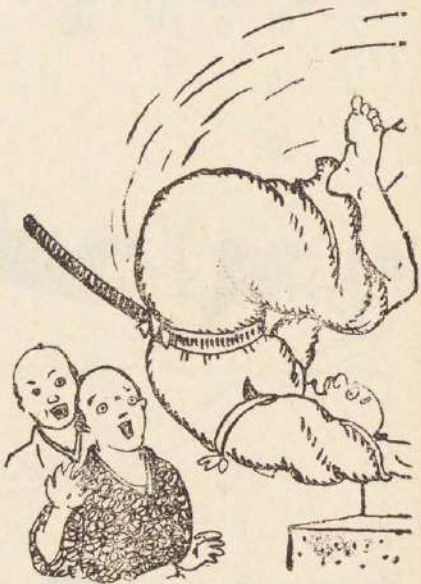
「御亭主、さて、己のやり方をよく聞いて置いてもらひたい。——盗棒は土藏の中で今か／＼と待ち構へてゐるに違ひない。だから土藏の戸を左右へ開くと盗棒は急にあかるくなつたのでハツと思ふから、其處で己がこの炭俵を投込むのだ。さうすれば 人が入つて來たものと思つて、いきなり炭俵に斬りつけるから、その隙をうかゞつて己がとび込んで行つ

て、こゝにある薪をもつて盗棒の刀を打落し、いきなり組みついて胸倉をとつて表へ投げ出すのだ。さうして起上つた處を召捕つてしまふのだ。さアいゝかな。よく見てゐてくれ。」

かういつて、三五郎は土藏の扉をうん／＼いひながら押開いて、

「そうれツ。」と、となつて一俵の炭俵を投げこみました。

武士の方では三五郎が外でべら／＼しやべつたのをすつかり聞いてしまつたので、先に來るのが



炭俵で、後から來るのが人間だと思つて平氣で身構へてゐました。

三五郎は俵を二俵とも投込んでしまつたので、用意の薪をにぎつて、

「この盗棒めツ。」と、飛込みました。武士は待ち構へてゐた事ですから、いきなり三五郎の襟首をつかんで、ドーンと、外へ投げつけま

した。

「オー痛い。」

と三五郎は叫びましたが、もう晩かつたのです。丁度投落された處が土藏の石の上だつたので、それなり氣を失つて、もう二度と目を開きませんでした。(をばり)



鳩

野口雨情

親鳩 子鳩

ほんとの堂鳩

畑の 中で

鳴いてた堂鳩

お寺の 脊戸に

鐵砲打ち通る

親鳩 子鳩

屋根から見てた

童謡 私の母さん (推薦)

加田 愛 咲

私の母さん

どうしたらう

燕に聞いたが

黙ってた

涙は七色

虹ばしら

夢でもいいから

あひたいな



幼年詩 しづく (推薦)

早野 ま す

右の方にあつた

しづくが

左の方へすうつと

よつて来た

二ついつしよに

なつて

ぼたりと

地に落ちた





童謡

野口雨情選

芋の葉

横濱市本牧町二三三四  
南 久 世

あの星ほしいな  
芋の葉の上に ころげて落ちろ

鉛

愛和縣西尾町和泉  
柳 原 直 一

婆やの脊中で鉛なめた  
誰にも言はずに 黙つてろ

蓮の露

山梨縣塞々原局區内  
高 橋 十 成

青い蛇の目が轉げた  
銀の瞳が轉げた  
とろ／＼瞳が流れた  
池の蛇の目も流れた

ふくろふ

石川縣金澤市河内町  
鹿 田 豊 子

森の中の遠眼鏡  
鼻の小父さん 遠眼鏡

兎さん

東京芝區櫻川町一〇  
小 山 夢 男

お月さんの中の兎さん  
お餅がつけたら  
投げとくれ

稲

茨城縣師範學校寄宿舎  
塙 紫 陽

カラリコロリは 鳴子の子  
ぼんやり立つてる案山子さん  
脊中に雀がとまつてた

雀

鹿児島縣高等農林學校寄宿舎  
武 田 金

雀の巢はどこだ  
四番目の屋根だ  
明日の朝さがそ

こほろぎ

宇都宮市旭町二丁目  
古 口 和 歌

コロ／＼蟋蟀  
お家はないの 戸棚の陰に  
母さんゐない

栗の實

京都市岡崎宮ノ脇  
天 川 松 二

ころりと落ちた栗の實  
ぼろりと落ちた栗の實  
明日は家へ歸れ

雨滴れさん

青森縣青森市大町四  
下 田 賢 一 郎

雨滴れさんてば雨滴れさん  
ビタ ビタ ビタ ビタ  
雨滴れさんてば雨滴れさん

熟柿

佐世保市外日字村犬尾  
藤 井 秀 雄

もう／＼熟柿はとるまいぞ  
もう／＼熟柿はとるまいぞ  
さつて轉んで土踏んだ  
もう／＼熟柿はとるまいぞ

山彦

廣島市空鞆町  
村 田 午 郎

オーイといふたら  
オーイといふた  
人真似山彦 真似山彦

雀の小父さん

岐阜縣羽島郡笠松町  
高 島 保 治 郎

私のお眼々がいたみます  
雀の小父さん見えておくれ  
お薬あつたら下さいな

寺

仙臺市八幡町二九  
天 江 登 美 草

鐘つくちやなし  
鐘よむちやなし  
お山の上の 日永なお寺

蜻蛉

大阪市外海老江一四四一  
中 村 太 良

蜻蛉 々々 赤蜻蛉  
目玉の蜻蛉 羽根蜻蛉

小人踊

熊本縣鹿託郡清水村至園  
牧 野 香 月

ピン／＼踊る小人が踊る  
一人で踊る  
跳ね／＼踊る

つく／＼法師

徳島縣徳島市通町  
三 木 胡 桃

つく／＼法師  
なき法師  
朝晩よく鳴く  
なき法師





「館屋」(賞)

東京市入谷小学校第五 岸田敬重

幼年詩

若山牧水選

七八

小犬

京都市錦林  
小学校第二 梅垣好子

猫(賞)

福島縣二本松  
第一小学校 吉田ヨシノ

雨降れば猫の毛は  
びつしよりぬれ  
猫がひやつこいと  
かんぶりふれば  
猫の毛は  
かわいた。

評、此處にも可愛い、瞳が輝いてゐま  
す。面白いと思つたこと美しいと  
見たことをそのまま歌へばこんな  
いゝ詩になります。(牧水)

海へ  
横濱第二日校 西田トク  
小学校高一

つばくら、つばくら  
どこへゆく。  
梅の青葉を荷へて  
波のうへを飛んでゆく。  
評、實にきれいな、繪の様な詩です。  
(牧水)

なすびがなりました  
三つなりました  
四つ五つとなりました  
おしるにたいてたべました  
ついでたくさんなりました  
評、もつと／＼なるでせう、もつとも  
つとおあがんない。(牧水)

鳥屋さん

兵庫縣細川第一  
小学校高一 深井重雄

えつさく  
鳥屋さん  
おや鳥子鳥を  
二つの籠に  
えつさく  
荷のて行く

煙突

愛知縣愛知  
小学校高一 櫻井光男

工場の屋根から  
煙突が  
煙をさびしく  
はいて居る

雨

兵庫縣細川  
第一小学校 澤井謙

大雨小雨  
雨の降る空に  
白い雲が赤べまきやつて  
紺糸ひいて  
どん／＼走る  
つるやちん

しろいエプロン  
あかいおくつ  
小さなしやつは  
頭にのせて  
可愛い／＼つるちやんの  
お旅行だ

たばこのむ人

東京市谷中  
小学校第六 阿出川 新治郎

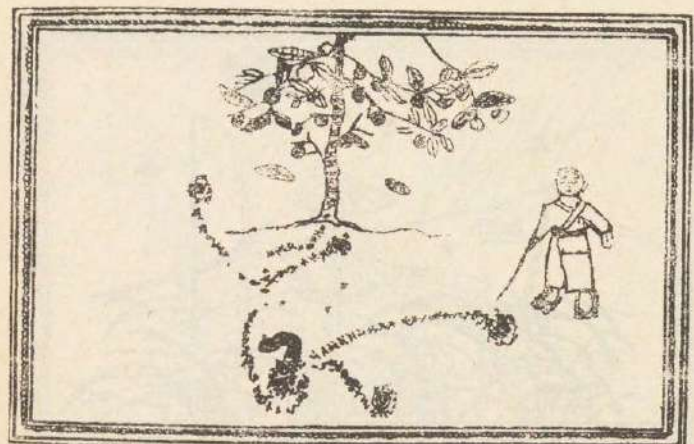
たばこのむ人すましてる  
ぶつと口からはいたけむ  
ふは／＼昇つて消えて行く  
泣みだいのおぢいさん  
たばこのみ／＼はなしてる

床屋の子

東京市小石川  
白山御殿町 小野 榮

しやうぎの好きな床屋の子  
仕事のひまにパチ／＼と  
おほきな大人を相手にし  
面白さうにやつてる  
そばでは煙草スパー／＼と  
御いん居さんがいきんでる

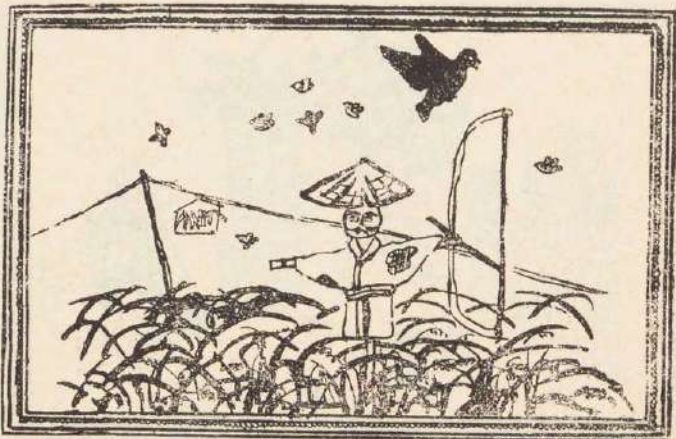
七九



「いも蟲とあり」

東京市番町小学校第二 岡島正人





「かし」  
山梨縣上九一色小學校尋五 土橋郁子

綴方

編輯 部選

長野縣岡谷 橋爪金吾  
小學校高二

蟻 (賞)

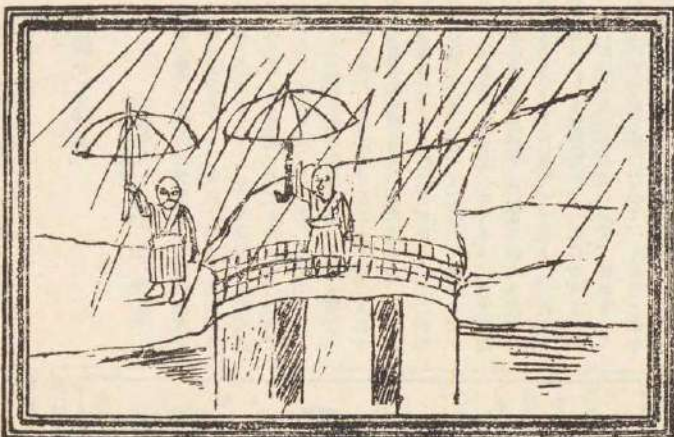
庭で一匹の蟻がみずの死骸を見つけた。まづひげで死骸にさばつて見た。みずがうごかないので、安心したといふふうには、こんどはそれにくいついて、二三回方限りひいたが、しかし少しもうごかない。蟻はしばらく考へてゐたが、みずをそのままにして、もときた道にひきかへした。

仲間にあふたぎに、ひげをすりあはせて何事か話すやうであつた。しばらくすると、蟻が三匹、四匹とやつてきた。それがみんなみずの死骸のまはりにあつまつた。十分ばかりたつと、みずの死骸は蟻でおほはれた。蟻は力をあはせて穴の方へはこびはじめた。

多恵ちゃん (賞)

朝鮮大邱公立 市川澄子  
第一小學校六

「多恵ちゃん、お年いくつ。」  
「サユウチヤンナ、チユ。」  
「いやだ、そりやノンナさん(お月様のこと)でせう。多恵ちゃんばタツチュ(二ツ)でせう。」  
「タツチュ、タツチュ。」  
右と左の人さし指を二つならべてかういふ。  
「わん／＼は何てなくの。」  
「ワン／＼。」  
「にやあ／＼は。」  
「ニヤ／＼。」  
「さう、ちやばば。」  
「コケコツコワ。」  
「飛行機は。」  
「ア／＼。」  
家へ遊びに来ると、きつと姉さんの机へ行く。  
「ベコ／＼、ドコタツカナア。」  
「ベコ／＼といふのは目薬をさすゴムのことをいふのらしい。お母さんが、  
『おしつ／＼をすると母ちゃんどうするの。』ときくと、『メ／＼つて。』と、妙な顔をして見かへる。ほんとに面白い多恵ちゃんだ。



「雨の日」  
東京市入 小學校尋五 長妻行雄

あ わ

大阪府柏原 坂井正男  
小學校生徒

雨の朝、ねぼけまなこで起きた。小さい庭は水で一ぱいであつた。あまだれの落ちる度にあわが出る。あわは水の上を走り、庭のすみにある竹きれにあたつた。と思ふ間もなくほんとにねた。さうして出来ては消え、出来ては消えしていつまで見てゐてもしまひにならなかつた。

雨

京都市日影 坪内伊都子  
小學校尋三

だん／＼空が曇つて来て、今にも雨がふつて来さうになりました。間もなくはつり／＼と、大つぶの雨がふりだしました。はじめの内はあまり、強くもふりませんでした。だん／＼つよくなつて、青ぎりの葉が動きだしました。強くもふつてくると、黒べいの向ふへ一尺ぐらいのはゞの小川が出来ました。あまみづがちよろ／＼ながれては入つてゐます。そこへおとなりのとひからぼつん／＼と、雨

がおちるので、そのたびにたくさんのあなができます。  
私はおもしろいので、雨のふりこんでくるらうかていつまでも見て居ました。お母さんは、いそいで水をくんで居られます。女中はせはしく／＼ことをして居ます。私が見るときも雨は、まだ、ふつて居ました。

白らさき

埼玉縣本庄 三宅貫一郎  
小學校四年

僕の家には白らさが一びきかつてあります。大そうかはゆらしくて、草をやると、すぐにたべてしまひます。このころは草がなくなつたから、とうふのからや、たうもろこしのかげをやりませ。僕の家の白らさきの目は、も／＼色で、そしてくらしい所へ行くとき光つて見えます。この間僕の家は白らさがにげ出して、いくらかおつかけてもつかまりません。おつかけて居るうちに家のうらのやぶへ入つてしまつたので、さしまつて居ると、こつちの方へ白らさがやつてくるので、そ／＼つとつかまへると、からだか



犬そのぬれて居ました。うまきはかはゆらし  
いけものです。

### 親犬と仔犬

福井縣高濱  
小學校高一 寺 西 千 代

夕暮の濱に三匹の犬が居る。二匹は親犬で  
一匹は仔犬であらう。父親と見える方の犬は  
白と黒とのつや／＼とした毛を持つたたくま  
しい犬である。母親と見える犬は毛は茶色で  
可愛らしく耳はたれ、たくましく又やさしく  
見える。二匹の犬の視線の集つて居る所は一  
脚髭先の座だめのほとりをかきまはつてゐる  
眞黒な立耳の可愛らしい仔犬である。きつと  
仔犬を見守つてゐるのにちがひない。二本の  
尾を行儀よく前に垂べて二匹共、餘一つ動か  
さないで仔犬の方を見つめてゐる。仔犬は親  
犬が氣になるのか時々長い首を親の方に向け  
て、ぼつちりとした目で一寸見る。けれども  
親犬達は少しも動かない。一心にかきまはつ  
てゐるが何も見つかからないので、疲れきつて  
砂の上にとつかと横になつて、くるりと顔を  
親犬の方に向けてちつと仔犬を見いつた。  
牝犬は少し後に居る牡犬の方をむいて居て  
又仔犬の方を目をつける。三匹のにらみ合ひ

が暫く續いた。が仔犬は倦いたと見えて、尾  
を長くのばして可愛らしい白い腹を見せなが  
ら口を大きく開いてあくびをした。さうして

八月六日晴  
「私ノカミガワルケ  
ツテ」  
「アラアナモノ  
笑ノ方ガ  
イイワ



横澤幸子

又そこらあたりをかきまはつて居る。けれど  
も親犬達はちつと仔犬を見つめてゐる。  
仔犬はそれに倦くと少しかみがへて居た

が、何を思つたのか親犬の方をきよりりとみ  
かへつたまゝ一般にかけて行つた。これを見  
た親犬二匹は揃ひも揃つて仔犬の後を追つて  
行つた。もう一度出て来ればよいと思つて居  
ると、牝犬の赤い尾がチツ／＼と見えるこ  
とがあるばかりで近くへは出て来ない。

### 不二子様へ

朝鮮大邱公立第 春海 佐智子  
小學校六年生

不二子様、ほんとにごめんなさいね、今日  
も又今日でだまつてかへつてしまふし、どん  
なにかうらんでいらつしやるかと思ふと、も  
うとても、じつとしては居られませぬの、昨  
日はお夕飯をすまして出かけようとしてゐる  
所へ、不意にお客様が見えて、何時までもお  
かへりになりませぬの、何時ご用事があるか  
も知れないものですから、出ることも出来な  
いので、たつたり坐つたり門の所へ出て見たり  
して、まだか／＼と思つてゐましたら、とう  
／＼夜になつてしまつたのです。床に入つて  
も、ごめんなさい、ごめんなさいねと、何度  
心の中で御わびをしたかわかりませぬ、今朝  
學校へ行つたら、すぐお詫びをしやうと思つ  
てゐましたのに、あんな具合にだまつてかへ

るし、ほんとにもう何と御わびのしようもあ  
りませぬ。どうぞ／＼、御めん下さいね、心  
からおわびいたしますわ

### きのこがり

長野縣高遠  
小學校尋四 油 上 ぶ じ

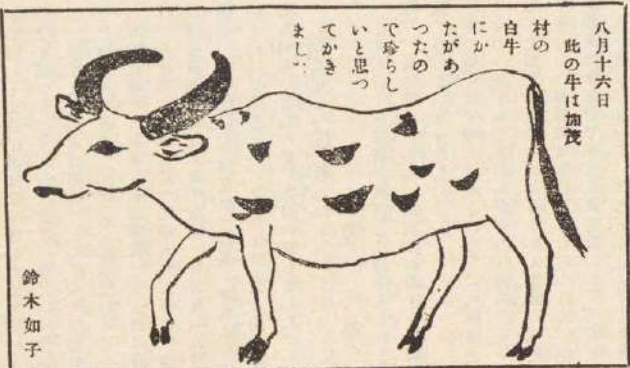
私は友だちの光つちやんと、山へきのこが  
りに行きました。五色にいろどられた秋の山  
の中をさん／＼歩きました。けれどもちつと  
もありませんでした。

それからしばらく行くと、光つちやがたい  
そうかたまつてゐるのを見つけて、  
『ふじや、とてもあるで。はやくおいで。』  
おほきな聲で呼びましたので、私もとんで  
行つてとらしてもらひました。その時はほん  
たうにうれしい氣がしました。それからだん  
だんおくへゆくうちに、私もみつめてたくま  
んとりました。  
うちへかへつてびくをあけて見たら、木の  
葉やこみがはんぶんだと、かちやんに笑は  
れました。

### ある晩

鹿鹿義塾 松 下 春 三  
幼稚園六年

夜中の一時頃目がさめた。れる時よくかぶ  
つて居たふとんは、すつとわきにころがつて



鈴木如子

居て隣に妹がすや／＼とれて居る。やがて夜  
廻りがカチ／＼とやつて来る。時々電氣が消

えさうになるので、僕はもう氣味が悪くて夢  
中でふとんをかぶつた。  
併し中々ねられないので、こぼ／＼目を開  
くと屋根の上の方でミン／＼と誰か／＼歩るく  
様な音がする。まもなく其の音が窓のさるく  
方で止つたかと思ふと、今度は玄関の方でか  
みりとした。僕は夢中で頭の先まですつぱり  
とふとんを着て、ちつと耳をすまして居たが  
そのまゝなつてしまつた。

### うたゝね

福井縣高濱  
小學校高一 松 本 せ い

『これ安ちゃん、又こんな所にうたゝねして  
早う起きなあれんな』と私は讀みかけの雑誌  
から眼を離してそばに寝てゐる妹をゆり起し  
た。『うゝん』と起きるやうなふりをして又ぐ  
つたりと横になる。うるさいと思ひながら『な  
ぞ安ちゃん何んば言うても。』と大聲で言ひな  
がら小さな鼻の頭を一すつまむと『うふふ。』  
と苦しうに鼻をつまらせ居る。私は手をは  
なしてすまして居ると、ねむたい眼をこすり  
ながら寝衣に着かへて『お清ちゃん蚊を捕つ  
て。』と言ふので私は今妹のいいた清物でかや  
の下の方を拂ふと、一二匹の蚊がブワンと鳴  
きながら飛んで行つた。





(通信)

繪日記入賞者

「金の船」九月號で募集いたしました身中休暇中の繪日記は十一月號で山本朋先生が、いねいに評してくだすつた左のお二人に、それぞれ賞品を差上げることになりました。なほ本號から三四ヶ月にわたつて、そのうちの特に優れたものを寫眞の版にして掲げることになりました。

野口雨情

近頃童話の議論が方々でやかましくなつて來ました。童話がさかんになつて來たなにより、の證據でありませう。ものことは理窟のつけやうで成る程と思はせることも随分あります。しかし、日本の童話には、日本の土のほひが一番大切で、日本の士をばなれて、

童話の選後に

選者

これが日本のほんたうの童話だといはれませうか。本號に推薦の加田愛咲さんの童話は調子の軽いところに面白味を感じました。いゝ作でも載せきれなかつた分は、雨だれ(森都二)木すまし(末廣薫雄)とんぼ(多田あやし)鏡(大橋清造)蟋蟀(平松東城)おぼじき(大西貞雄)大眼玉(小林雪枝)空(白江好郎)お月様(山田京二)蝸牛(大矢季代)蟻(淺井滋夫)晩夏(金子淑澤)百舌鳥(佐野陽二)螢の花屋(青柳花明)朝顔(鈴木紅葉)姉さん(長野清一郎)夕焼(佐藤小澄)其ほか七八篇ありましたが、次號へ廻しました。

童話の選後に

選者

こんどは十一月號で報告しておきましたとほり、島田國子さんの「劍術のお弟子」を推薦することになりました。その他ではつと小さく、大塚恒子さんの「鳥とふるふ」夢の二篇ほどは、もごく短かいものながら、つと興味のない子供らしい無邪氣な作品でした。これはいつか誌面に餘白ができたら發表致します。旅順からお送りになった、林夏荷君の「狐」は全體の調子はよほど幼稚なものが、それだけ純朴なところもあつてかなり無難な作です。白

金の船消息

江好郎君の「蝸牛の家」には美しい詩があり、す。蝸牛の殻が日光を浴びて唄を歌つてゐたり、眞珠の輝下をすん／＼奥へはいつて行くあたりはいゝものです。その他、齊藤深泉氏の「不思議なお蝸」藤井秀雄氏の「金の船と銀の船」佐藤勝彦氏の「風仙花の種」牧野香月氏の「風の子と二本の甘柿の話」松本正樹氏の「山男の話」松井淡翠氏の「初めて鮎を釣つた話」古井佐美氏の「道吾語」静岡紅草氏の「天空太郎」などはながでもいゝ方でした。

綴方を讀んで

選者

橋爪君の「蟻」は一匹の蟻が庭ではたらいてゐるところを見て書いたのですが、小さなことなていれいに見てゐるのかんしんしました。坂井君の「あわ」寺西さんの「親犬と仔犬」でもめんみつに見てゐる所が、と思ひました。何でもかといふやうによく見る、こがたいじです。

市川さんの「多恵ちゃん」春海さんの「不二様」はうまいもんです。松本さんの「うたれ」でも、松下君の「ある晩」でも、みんなうまいもんだと思ひました。この中で坪内さんの「雨」には一番子供らしい氣もちがでてゐます。

▼西條八十先生の「長篇童話 鏡國めぐり」は新年號預告に出てゐる通りですが、この讀物は明年一年間毎週續けて載る豫定で、これは世界的に有名な童話です。西條先生の美しい筆によつてどんな面白讀物として皆さんに迎へられる事です。▼長田秀雄先生の「蟻のお國」は近頃での大作として非常な評判でしたが、それよりも尙一層面白い長篇讀物「鳥追船」といふ、あはれな母と子の物語りも新年號にのります。▼正眼 十月號九頁 大濱小學校は、高濱小學校。九二頁 小橋梅子は小橋幹子さんのまちがひでしたから訂正いたします。▼第一回東京童話會「金の船」の童話を中心にした日本で始めての催しであり、童話會を中心として非常な好評でしたが、それよりも尙及會が前號所報の九月廿六日午後一時から四谷區舟町三番地都築病院の三層樓上で随分盛大に開かれました。最初に、同會の發會について都築益世、大沼廣、佐藤盛二、加田愛咲、佐藤勝彦、新津孝一、花形青雲、寺田文次郎の諸君が勵力された報告がありました。次に來會者諸君の童話互選の結果は磯燕(長谷川良夫)かまきり(都築益世)野火(須藤逸郎)石



讀者通信

▼僕はこんど「金の船誌友」になりました。クラスの人たちにもすゝめて支部をつくりたいと思つております。(福井 石橋周)▼大きいナリして「金の船」可笑しいな!私いつも皆様から笑はれてをります。でも私は美しい空想に生きてゐたいんですもの。私の好きな「金の船」の小父さん! いゝでせう? (東京 瀧川壽和子)

▼金の船「アレアルセン號」十月號は實に面白く拜見しました。(熊本 牧野香月)▼アンデルセン號の御批評ありがたく拜見致しました。(記者)▼もうすつかり稲も刈られました。雀の聲を聞いては談を作つてゐます。それから私も十月から「金の船」の誌友になりました。序にお尋ね致しますが、童話の字数制限はどうでせうか。作者の自由にしていただけませんか。それから、自由畫は鉛筆畫でも、水彩畫でも、ペン畫でも宜しいのですか。通信欄でお知らせ下さい(佐世保 藤井秀雄)▼童話はなるたけ規約通りに書いていただきたいと思ひますが、必ずしもとは言ひません。自由畫は鉛筆でも水彩でも何でも宜しい。併し投稿者は小學生童とその程度の子供に限ります。(記者)▼私の妹も「金の船」の讀者になりました。まよなら。(東京 松下春三)▼私は弟と一しよに「金の船」の創刊號からの愛讀者ですが、こんどはいゝ／＼誌友になりました。きのふは待ちこがれてゐた、一周年記念號が参りました。大そう面白くて、こんなに上手に童話が書けたらとつく／＼思ひました。(愛媛 加藤淑)

▼日本で始めて催された「金の船」童話會の新しい運動を私はうれしく感じました。次會には私も友人を誘つて出席致します。(東京 村山城川)▼私の自由畫は何故没書になつたのかお知らせ下さい。(宇都宮市 森田友子)▼よくかけてゐなかつたからでせう、よく出来てゐます。すれば没書にはなりません。(記者)▼自由畫は横にかいていただくかまひませんか。(北海道 伊藤長)▼成るべく横にかいて下さい。(記者)



地蔵(佐藤藤三)はつた(廣田守一)星(加藤辰)いもむし(大沼ひろし)の諸作が高點を得ました。それから、岡本隆一先生、齋藤佐次郎先生、山本午復先生が、少年文藝についてのお話をいたされました。おしまひに野口雨情先生は「日本童話の發達について」の講話と、互選童話の概評とをいたされました。

これは日本で始めての童話講話で随分益有なものであります。當日の出席者は、叶九枝氏を始め、生田秀三君、坂本喜芳君、大沼廣君、加田愛咲君、



(標影君しろひ沼大) 氏諸席出會緒童京東同一第船の金

小山夢雄君、加藤辰君、熊谷平八君、黒田秋君、本多江陽君、狩野鐘太郎君、川口鹿一郎君、佐藤勝熊君、佐藤盛二君、坂田隆春君、齋藤漢泉君、須藤逸郎君、都築益世君、寺田淳一郎君、寺田文次郎君、都築爲世君、廣田守一君、芳香信愛君、吉本明光君、澤江六太郎君と本誌から岡本隆一、齋藤佐次郎、山本午復、野口雨情の四先生で出た(寫眞参照)出席する皆々來ることの出来なかつたのは仙臺市の天江登美草君と東京では塚本

▲自由畫佳作 △萬燈 東京 藤田邦雄△ぼくの學校 東京 鶴田靖△マツメクサ 大阪 山本恒司△私の人形 東京 佐々木三保子△ラッケット 大阪 坂井正男△土瓶と茶碗 東京 宇野弘△花瓶 東京 川岸恒彦△電氣 京都 西村劍嶺△繪具 兵庫 白井忠二△水差し 東京 元橋賢治△秋の景色 東京 菅原又七郎△泳ぎに行く所 東京 菅野圭介△オネエサン 京都 馬場英津江△我家のカラメル家 兵庫 山口房子△ぶらんこ 東京 大塚恒子△秋の郊外 青森 沼田みや△汽船 兵庫 柳一兵衛△舟と人 東京 長野英夫△うさぎ 長野 秋山晴雄△燈臺朝鮮 竹本爲伊△植木鉢 佐世保 藤井秀夫△山道 岡山 木村誠三郎△月と兎 横濱 白杵春太郎△鳩 鳥取 鎌田錦壽△谷川 埼玉 岡根三郎

▲幼年詩佳作 △こぼろぎ 宇都宮 三親秀子△ほうづき 福島 吉田ヨシノ△くもの巢 福井 柴田勲△つばめ 同 魚住隆三△鳥 同 胡問六郎△半の葉 同 坪内千代子△爺や 長野 島岡已勝△くれくれ坂 岡山 木村誠三郎△すゝめ 同 中川悦治△蛙 神奈川 加藤庄太郎△松茸 岡山 岸ヒロシ△夕暮 東京 加藤みどり△赤とんぼ 東京 關

# 金の船新年號豫告!!

雙探 六 大附録付

新年號の「金の船」は、これまでにない立派な盛裝をして生れます。第一に、少年少女挿畫界の大家岡本隆一先生苦心の新案「雙六寶探し」が極彩色刷の大附録となつてつきまします。記事の方では、

▼鏡國めぐり.....西條八十

▼鳥追船.....長田秀雄

▼壇の浦合戦.....窪田空穂

そのほか、楠山正雄先生の童話、沖野岩三郎先生の童話、藤澤衛彦先生の諸國傳説童話、齋藤佐次郎先生の少年少女新講談、野口雨情先生の童話「にはとりさん」本居長世先生の作曲、どれも少年少女諸君の興味あるものばかり載ります。

口遊吾△お月さん 京都 西村劍嶺△小鳥山口 川村きみ△ざくら 愛知 榎原千代△蛙の母さん 同 榎原直逸△花火 大阪 稻垣秋雨

▲上方佳作 △籠 福井 伊藤作次郎△寫生 同 早野ます△秋の初め 兵庫 藤原要△インシヨ 同 小原基治△赤ちやん 宇都宮 大橋エイ子△夏の朝 福岡 荒川清△夕立和歌山 淺井惟一△秋の月 群馬 折茂豊△露 滋賀 吉本かく子

▲金の船誌友 ○神戸 鈴江八十八君○北海道 齋藤きり君○群馬 青柳花明君○愛媛 加藤正文君○東京 藤田圭雄君○東京 高橋游君○長野 久保健君○長野 松澤俊雄君○鹿児島 二川純雄君○佐世保 藤井秀雄君○大分 佐田實根君○名古屋 丹波正海君○長野 大和佐登枝君○山形 近江屋源治君○千葉 大島ワノ君○横濱 芳賀秀雄君○神戸 増田茂一君○京都 村山富君○茨城 渡邊雄三郎君○石川 小島三郎君○長崎 飯島衛太郎君○秋田 三田耕平君○東京 大島憲三君○山梨 谷越幸次郎君○福岡 安達謙一郎君○大阪 山添平八君○大阪 梅垣愛子○青島 永江八郎君○旅順 國府廣君 (以下次號)



# 「金の船」の合本

◆第一輯（第一巻初號より第二巻四號まで六冊合本） 定價壹圓五拾錢

◆第二輯（第二巻五號より第二巻十號まで六冊合本） 定價壹圓八拾五錢

（第一回製本全部賣切れ！第二回製本が出来ました！）

金の船 世界名作童話集 定價 參拾五錢

（何れも部數に限りがありますから、賣切れない内に至急お申込み下さい）

## 少年少女の創作募集

（原稿は東京府下田端三五一番地）

### 自由畫、山本鼎先生選

自由畫は、お手本や雜誌の畫なんか見ずに、花なり、景色なり、動物なり、お母さんのお顔なり、なんでも好きなものを、かつてに描いて下さい。

### 幼年詩、若山牧水先生選

幼年詩は、山なり森なり花なり、何でもの好きなきやうに詩にしてください。

### 綴方、編輯部選

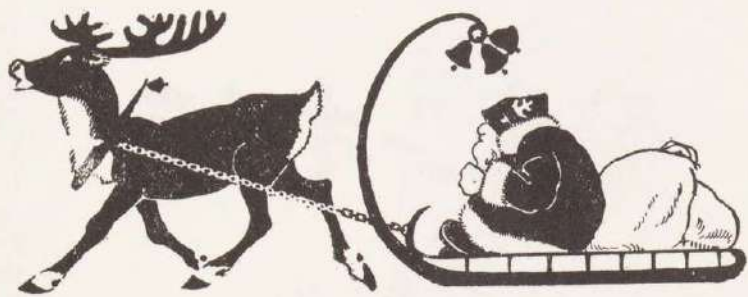
綴方は、みなさんが見たこと、思ったことなど、そのまふだんつかつてゐる言葉で書いて下さい。

## 童話童謡募集

毎月童話童謡を募集いたします。題材は作者の自由ですが、内容も形式も、藝術味があり且つ子供に喜ばれる面白い作品に限り、童話は二十字詰百行内外、童謡は二十行以内。優秀作品は本誌に掲載し、賞金を差上げます。童謡は野口雨情先生選、童話は編輯部でいたします。

## 「金の船」誌友募集

「金の船」の誌友を募集いたします。誌友規則は、編輯所宛にお申込み下さい。どなたにも、すぐお送りいたします。



「サンタクロースのお爺さん、お爺さんの後に大きな袋があるのねえ。」

うん、あるとも、あるとも。

「中には、どつさり好いものが這入つてゐるのでせう？」

うん、さうぢや、さうぢや。

「どうするの、その中のもの。」

クリスマスの贈物ぢや、わしを待つてゐる子供たちに、みんな分けてやるのぢや。

「さう！嬉しいわね、そして中のものななに？」

中のものはね、それは、綺麗な繪雑誌だよ。

「ぢやあ、日本の子供かナカヨシでせう。」

おや、どうしてそれを知つてゐるのぢや。

「だって、去年もクリスマスに日本の子供とナカヨシをお爺さんに頂いて、私嬉しかったから覚えてゐるのよ。」

さうか、さうか。今年もあげるよ、今年もあげるよ。

定價 一冊三十錢 送料壹錢  
三ヶ月分三冊（送料共）九十錢  
半年分六冊（送料共）壹圓八十錢  
壹ヶ年分十二冊（送料共）三圓四十錢  
編輯所 東京府下田端三五一番地

廣告料は御照會次第お答へいたします。

送）御注文は必ず前金で御拂込み下さい。送金は小爲替でも切手代用でも宜敷い御座います。  
金）切手代用は（壹錢切手）割増に願ひます。  
注）御注文の場合は第何巻第何號よりと云ふことなほつきり書いて下さい。  
（意）住所姓名は丁寧に分りよくお書きください。

東京府下田端三五一番地

「金の船」編輯所

大正九年十一月四日印刷納本（毎月一回）  
大正九年十二月一日發行

編輯人 佐次郎  
發行所 東京府下田端三五一番地  
印刷所 東京府下田端三五一番地  
印刷所 東京府下田端三五一番地  
東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地  
發行所 キンノツツノ社

日本の子供の贈物 一冊五錢  
六ヶ年分 六冊 共計 三圓六十錢  
二十ヶ年分 二十冊 共計 一圓二十錢

發行所 東京府下田端三五一番地  
「金の船」編輯所  
電話 二七五〇

カナカヨシ 一冊五錢  
六ヶ年分 六冊 共計 三圓六十錢  
二十ヶ年分 二十冊 共計 一圓二十錢



K2A-17

# 磨齒ニオイラ

は時くかみを齒



夜  
ね  
る  
前

外  
から  
歸  
つ  
た  
時

きとたきお朝

大正八年十月十六日 大正九年十一月四日印 刷 刷 本  
前 三 冊 出 世 三 冊 大 正 九 年 十 二 月 一 日 發 行 毎 月 一 回 一 冊 發 行

東 京 キ ン ノ ツ ノ 社 發 行

(定價參拾錢)